

平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物新築工事に伴う平安京跡・公家町遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

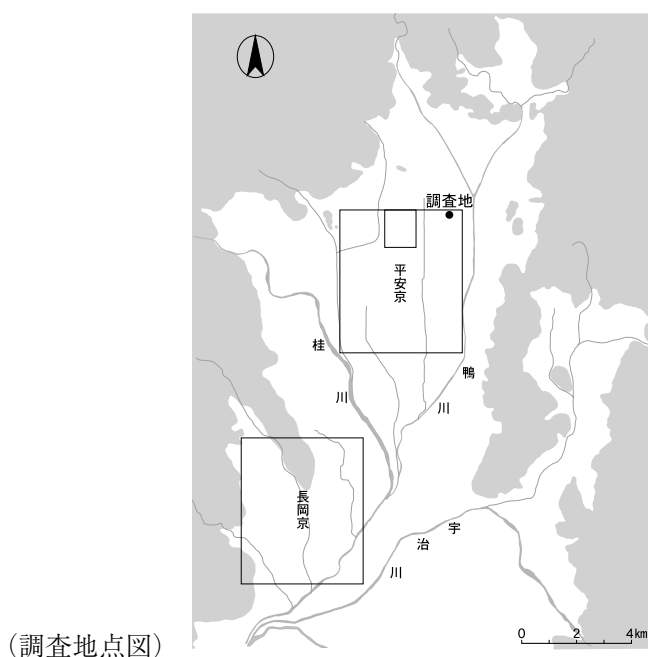
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成24年12月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡（文化財保護課番号 11 H 193）
- 2 調査所在地 京都市上京区京都御苑3
- 3 委 託 者 株式会社澤野工務店 代表取締役 澤野茂治、
支出負担行為担当官 近畿地方整備局長 上総周平
- 4 調査期間 2012年7月9日～2012年9月4日
- 5 調査面積 408㎡（1区：281㎡、2区：127㎡）
- 6 調査担当者 小松武彦
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「船岡山」・「相国寺」・「聚楽廻」・「御所」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 遺物の種類別に通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 小松武彦
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の経過	1
(2) 調査地の位置と歴史的環境	2
(3) 周辺の調査	3
2. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 安政度内裏前後から昭和時代の遺構（第1面）	7
(3) 寛政度内裏前後の遺構（第2面）	11
(4) 宝永度内裏前後の遺構（第3面）	17
3. 遺 物	19
(1) 土器類	19
(2) 瓦類	23
(3) その他の遺物	25
4. まとめ	26

図 版 目 次

図版1 遺構	1	1区第1面全景（北から）
	2	2区第1面全景（北東から）
図版2 遺構	1	1区溝55（東から）
	2	2区溝45（北から）
	3	2区井戸52（東から）
	4	1区土坑18（東から）
	5	2区建物1（新）礎石67（北から）
	6	2区建物1（新）礎石70（北から）
図版3 遺構	1	1区第2面全景（北から）
	2	2区第2面全景（北東から）
図版4 遺構	1	1区溝13（南東から）
	2	2区溝96（北から）
	3	1区溝98（北東から）

- 図版5 遺構 1 1区溝46(西から)
 2 2区土坑111(北から)
 3 1区溝73(西から)
 4 1区建物1(新)礎石41・(旧)礎石113(東から)
 5 2区建物1(旧)礎石99(北から)
 6 立会調査溝112(南西から)
- 図版6 遺構 1 1区第3面全景(北から)
 2 2区第3面全景(北東から)
- 図版7 遺物 1区土坑18・19・35、柱列1柱穴37出土土器
- 図版8 遺物 1区溝46、2区土坑111出土土器
- 図版9 遺物 1 1区土坑35出土墨書土器
 2 塩壺・土製品・錢貨・石製品
- 図版10 遺物 棟丸瓦・軒瓦・軒棧瓦

挿 図 目 次

図1	調査位置図(1:2,500)	1
図2	調査前全景(北から)	2
図3	作業風景(北から)	2
図4	遺構養生(東から)	2
図5	関係者説明会風景(北西から)	2
図6	調査区配置図(1:600)	2
図7	周辺調査地点位置図(1:5,000)	4
図8	基本層序(1:40)	5
図9	第1面遺構平面図(1:200)	6
図10	1区土坑18実測図(1:40)	7
図11	1区溝55・66、2区溝45、1・2区柱列1実測図(1:100)	8
図12	1・2区建物1(新)実測図(1:80)	9
図13	1区溝21・22、礎石67・79実測図(1:80)	10
図14	1区石列76実測図(1:40)	11
図15	第2面遺構平面図(1:200)	12
図16	1区溝13・69、2区溝96実測図(1:100)	13
図17	1・2区建物1(旧)実測図(1:80)	14

図18	1区溝98実測図（1：50）	15
図19	1区溝46実測図（1：40）	15
図20	1区溝73実測図（1：50）	16
図21	2区土坑111実測図（1：20）	17
図22	第3面遺構平面図（1：200）	18
図23	土器実測図1（1：4）	20
図24	土器実測図2（1：4）	21
図25	土器実測図3（1：4）	22
図26	土器実測図4（1：4）	23
図27	瓦拓影・実測図（1：4）	24
図28	銭貨拓影（1：1）	25
図29	石製品実測図（1：2）	25
図30	『安政造営内裏図』部分（京都大学附属図書館所蔵）	26
図31	遺構配置図（1：300）	27
図32	宝永度御造営内裏平面図（宝永六年：1709）	28
図33	延宝度御造営内裏平面図（延宝三年：1675）	28
図34	寛文度御造営内裏平面図（寛文二年：1662）	29
図35	承応度御造営内裏平面図（承応四年：1655）	29
図36	寛永度御造営内裏平面図（寛永十九年：1642）	29

表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	19

平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡

1. 調査経過

(1) 調査の経過

調査地は京都御所の清所門北東脇に位置する。当地に、京都御所奉仕団休所棟と京都護衛署第1警備待機所棟の建設が計画された。そのため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施したところ、江戸時代の火災層と整地面を検出し、遺構が良好に遺存していることを確認した。その結果を受けて、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を行うこととなった。

調査地は平安京左京北辺四坊一町にあたり、平安時代後期に左近衛中将源憲俊邸、鎌倉時代初期に藤原忠行邸が所在したとの記述が残されている。これ以降は史料に乏しく、江戸時代に入り、寛永十八年(1641)の内裏造営で御所内に取り込まれた。京都御所の『安政造営内裏図』(京都大学附属図書館所蔵)によると「取次部屋」・「対屋会所」・「修理職物置」とされる建物が記載されており、当建物に関連する遺構の検出が予想された。

調査は京都御所奉仕団休所棟に第1調査区、京都護衛署第1警備待機所棟に第2調査区(以下「1区」・「2区」とする。)を設定し、設計の掘削深度までを対象として行うことになった。

2012年7月9日から重機で現代層を掘削し、以下第3面までの調査を人力で行った。その結果、第1面では江戸時代末期から昭和時代の井戸・建物基礎・雨落ち溝・石組溝・礎石建物・路面な

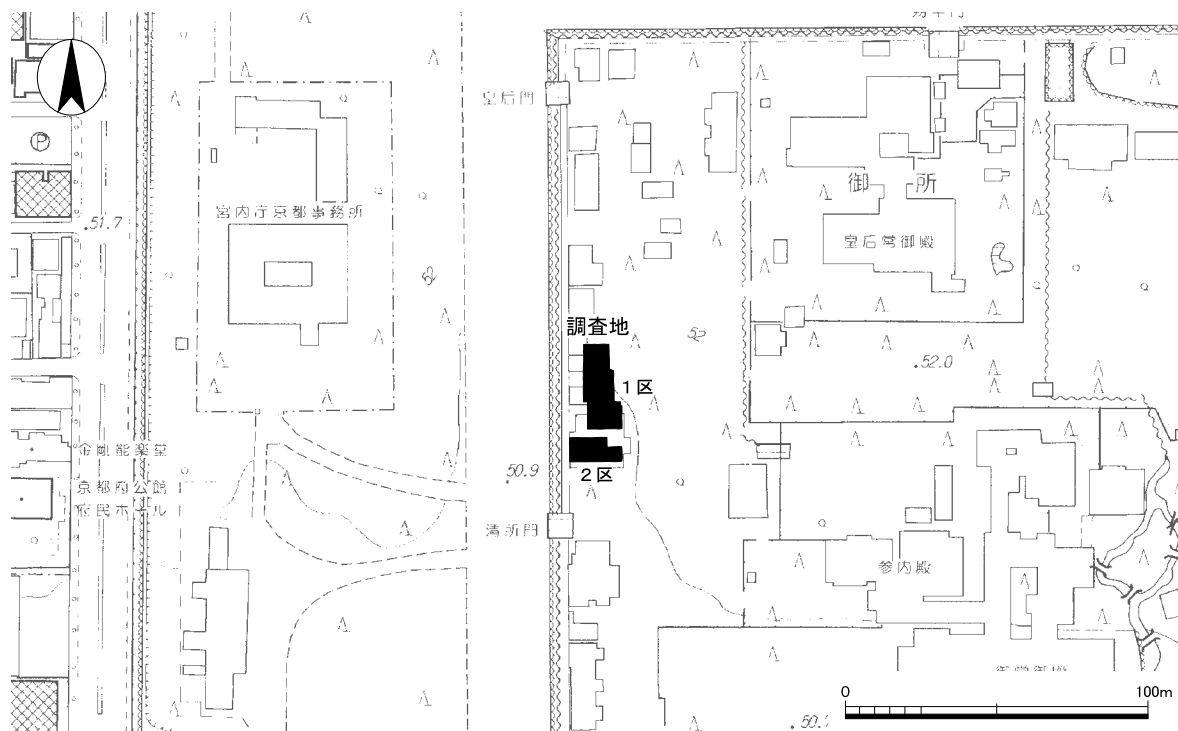


図1 調査位置図 (1:2,500)



図2 調査前全景（北から）



図3 作業風景（北から）



図4 遺構養生（東から）



図5 関係者説明会風景（北西から）

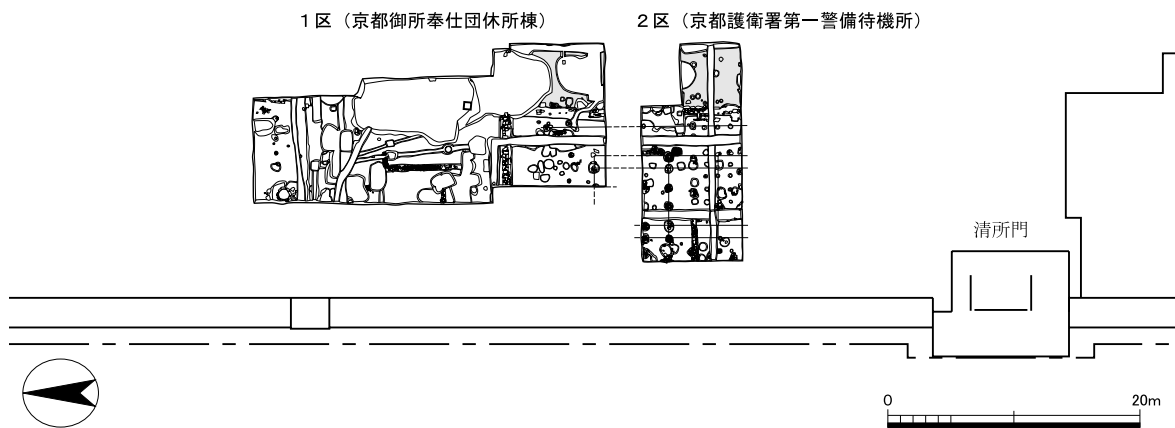


図6 調査区配置図（1：600）

ど、第2面では江戸時代後期の石組溝・礎石建物・路面・土坑・火災層など、第3面では江戸時代中期から後期の建物基礎や整地層を検出した。なお、掘削の設計深度より深い遺構は養生を施し、埋め戻して9月4日で調査を終えた。

また、8月27・28日には、宮内庁職員を対象に関係者説明会を開催した。

（2）調査地の位置と歴史的環境

内裏（御所）は、延暦十三年（794）に平安京遷都されて以来、大内裏の中にあったが、天徳四

年（960）に初めて焼失、その後も度々炎上して再建が繰り返され、そのたびに京内の貴族邸宅や後院の仮御所が内裏とされていた。しかし、安貞元年（1227）の火災以降は、内裏は再建されず、荒廃していく。その後、天皇は里内裏である貴族邸宅を転々としていたが、元弘元年（1331）に光厳天皇が即位した時、左京北辺四坊二町にあった里内裏の土御門東洞院殿を皇居と定めた。これが現在の京都御所の始まりとなる。

当初の御所は現在の紫宸殿と清涼殿のあたりで、規模は1町四方余りと今より小さかった。この内裏も放火などの火災で焼失と再建を繰り返し、戦国時代には荒廃していたが、近世初めに足利義昭を奉じて入京した織田信長によって、元亀二年（1571）に修造される。その後を引き継いだ豊臣秀吉も天正十九年（1591）に天正度内裏造営を行い、同時に京都の改造の一環として御所の周辺に公家を集住させ公家町が形成された。

江戸時代に入ると、徳川家康は秀吉が造営した内裏を取り壊して、慶長十八年（1613）に慶長度内裏を新たに造営した。寛永十九年（1642）の寛永度内裏は、小堀遠州を奉行として御所の本格的な造営を行い、北東隅を残して北と東へ拡張し、規模は増大する。これ以降の造営は火災によるもので、承応二年（1653）の火災に伴う承応度内裏（承応四年：1655）、万治四年（1661）の火災に伴う寛文度内裏（寛文二年：1662）、寛文十三年（1673）の火災に伴う延宝度内裏（延宝三年：1675）、宝永五年（1708）の火災に伴う宝永度内裏（宝永六年：1709）、天明八年（1788）の火災に伴う寛政度内裏（寛政二年：1790）、安政元年（1854）の火災に伴う安政度内裏（安政二年：1855）と、火災のたびに再建を繰り返し、敷地規模や建物の配置などが変化した。

その中でも寛政度内裏は、裏松固禪の「大内裏図考証」に基づき、紫宸殿・清涼殿・飛香舎などの舎殿を平安宮内裏に準じた復古様式によって造営しており、その後の安政度内裏は寛政度内裏を踏襲して再建されている。現在の京都御所は慶応元年（1865）に北東隅が拡張され、今の規模となっているが、おもな建物は安政度内裏のものである。

（3）周辺の調査

調査地は京都御所内にあり、公家町を形成していた周辺一帯は1949年に国民公園「京都御苑」として自然や景観が保存され、原則開発は行われない。そのため調査事例は少ない。

1975年に御所内の北東部で行われた調査1では、一条大路の路面と溝を中心に、平安時代および鎌倉時代から江戸時代の遺構面が検出された¹⁾。1999年に御所の南東隅で実施した調査2では、宝永五年（1708）と天明八年（1788）の火災層を伴う道路敷や柵列、寛政度内裏の造営時に敷地を南側へ拡張した際に築かれた南北築地などが検出された²⁾。2000年に宣秋門外の南西側で実施した調査3では、弥生時代後期の遺構、平安時代から室町時代の遺構と、桃山時代から江戸時代末期の火災層を含んだ路面を検出した³⁾。1997年から2002年にかけて御苑北東側で実施した調査4では、古墳時代と飛鳥時代の流路、平安時代の園池や道路、鎌倉時代の地業・道路・柱列、室町時代の建物や濠、江戸時代の公家町の建物・能舞台・園池・道路などを検出した⁴⁾。2001年に建春門外の北東側で実施した調査5では、平安時代の遺構と、宝永五年（1708）の火災で焼失した花山院邸の建物を検

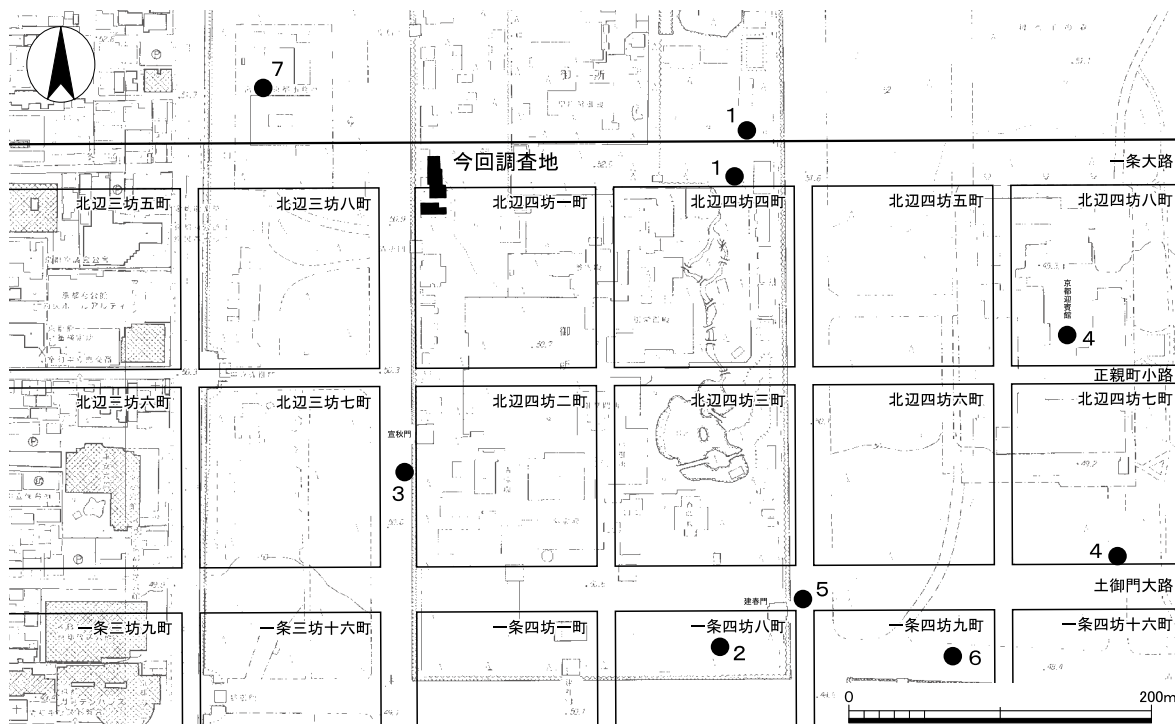


図7 周辺調査地点位置図（1：5,000）

出した。⁵⁾ 2002年に大宮御所北側の「広小路」で実施した調査6では、宝永五年（1708）と寛文十三年（1673）の火災で焼失した鷹司邸の建物・築地・蔵を検出した。⁶⁾ 2009年に御苑北西側で実施した調査7では、平安時代と室町時代の遺構と、江戸時代的一条邸の建物・井戸・地業・池を検出した。⁷⁾

御苑内の公家町遺跡としての調査では、建物などの多く遺構を検出しているが、御所内では今回初めて建物遺構を検出しており、一部ではあるが建物の変遷を明らかにする資料を得ることができた。

註

- 1) 松井忠春・佐々木英夫「平安京推定一条大路跡第二次調査概要」『古代文化』第29巻9号 古代学協会 1976年
- 2) 長戸満男「平安京左京一条四坊」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 3) 上村和直「平安京左京北辺三坊」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 4) 『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 5) 鈴木久男・西村洋子「平成13年度発掘調査」『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 6) 東 洋一「平成14年度発掘調査」『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 7) 丸川義広『公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年

2. 遺 構

今回の調査は、建物基礎の構造から掘削深度に規制があったため、結果的に江戸時代以降の遺構を対象として調査を行うこととなった。

(1) 基本層序 (図8)

基本層序は、調査区西半の建物跡側と東半の路面側では異なっている。路面側は、地表下0.1mまで現代盛土、0.1～0.3mが小礫混じりの路面が3面、0.3～0.4mまでが整地層である炭混じりの暗褐色砂泥、0.4m下は褐色砂泥である。

建物側は、地表下0.05mまでが現代盛土、0.05～0.1mが褐色砂泥、0.1～0.15mが褐色砂泥の焼土層(第1面)、0.15～0.2mが暗褐色砂泥の焼土・炭混層(第2面)、0.2～0.3mが小礫混じりの暗褐色砂泥、0.3～0.4mが黄褐色砂泥に褐色砂泥の礫混じり、0.4m下がにぶい赤褐色泥砂の焼土層(第3面)となる。焼土層は上から安政・天明・宝永の火災層と考えられる。

各面で検出した遺構は、第1面では明治時代から昭和を含む安政度内裏(1855)前後の遺構を、第2面では天明の火災(1788)後の寛政度内裏前後の遺構を、第3面は江戸時代中期の整地層と西側で建物の基礎と整地層に入れられた花崗岩の切石などを検出した。

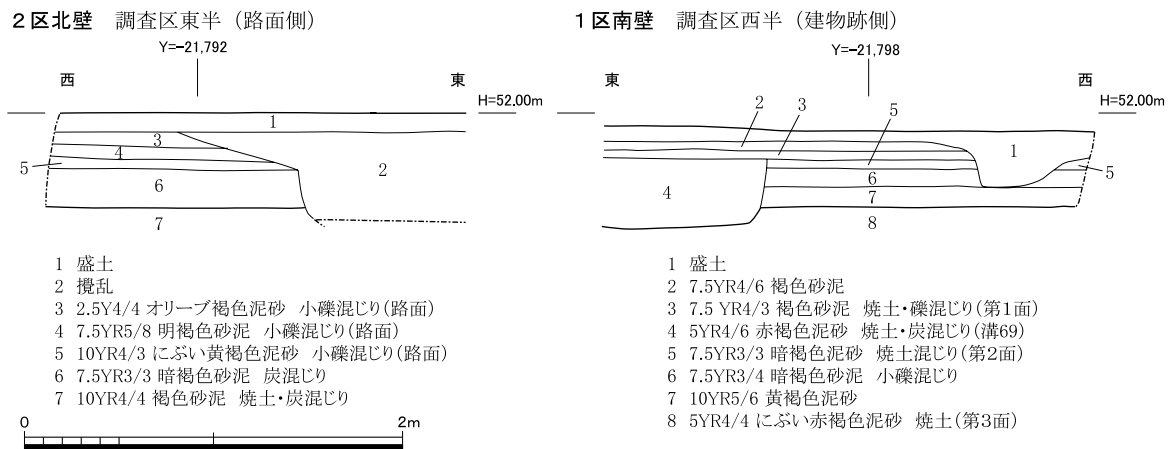


図8 基本層序 (1:40)

表1 遺構概要表

時 代	1 区 遺 構	2 区 遺 構
江戸時代前期～中期 (宝永度内裏前後)	溝73、集石100・102、焼土面、集石群115	建物2、整地層
江戸時代後期 (寛政度内裏前後)	路面1(旧)、建物1(旧)、 溝13・46・69・98、土坑77・87 立会調査：溝112	路面1(旧)、建物1(旧)、 溝96、土坑111
江戸時代末期(安政度 内裏前後)～昭和時代	路面1(新)、建物1(新)、柱列1、 井戸7・47、溝21・22・48・55・66・112、 土坑18・19・35・109、石列76、礎石67・79	路面1(新)、建物1(新)、柱列1、 井戸52、溝6・10・45・57・89、 集石85、石列1

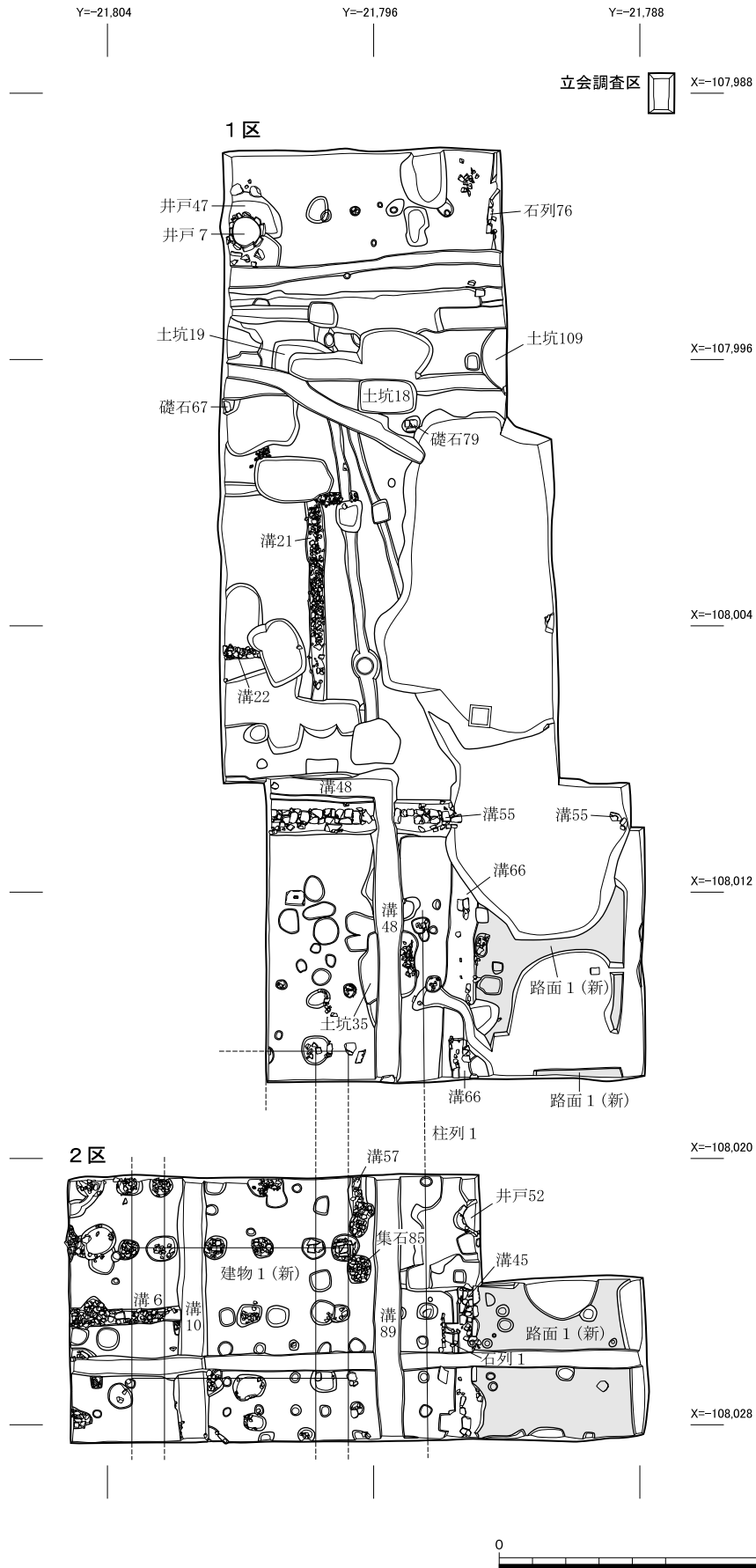


図9 第1面遺構平面図 (1:200)

(2) 安政度内裏前後から昭和時代の遺構 (第1面) (図9、図版1)

1区井戸7 調査区の北西側で検出した石組の井戸である。内径0.9mの楕円形を呈する。花崗岩の切石を用いた石組で、石の間にはモルタルが充填されている。埋土から昭和の時代を示す遺物が出土した。ただ、廃絶時期は昭和であるが、江戸時代より踏襲された井戸の可能性はある。

1区井戸47 井戸7の北隣で検出した井戸で、井戸7に攪乱される。直径が1.5m以上の円形で、深さ1.2m以上である。埋土から花崗岩などの石材が出土しており、石組井戸と推測され、井戸7の前身にあたると思われる。

2区井戸52 (図版2) 調査区の北東側で検出した。直径1.1mの石組で楕円形を呈する。石の間にはモルタルが施される。近代に補修され廃絶した井戸であるが、元来は江戸時代に掘削され、近代に至るまで使用され続けていたと考えられる。

1区溝48、2区溝10・89 1区南側から2区中央および西半部で検出した建物の基礎地業と考えられる布掘り溝である。東辺と北辺が溝48・89、西辺が溝10である。検出長は南北が17.2mで、南側は調査区外に延びる。東西幅(溝10と溝89の芯々距離)は約6mである。各溝の幅は0.8~0.9m、深さ0.7mである。断面形は逆台形を呈する。埋土は2層に分かれ、上層はにぶい黄褐色砂泥、下層は暗褐色礫で5~10cm大の石が充填されている。

1区土坑18 (図10、図版2) 調査区の中央北寄りで検出した土坑である。平面形は長方形を呈する。東西1.7m、南北1.0m、深さ0.8mである。埋土は黒色砂泥の炭層で、完形の土師器皿などが出土した。

1区土坑19 土坑18の北西で検出した土坑で、東辺と南辺は攪乱される。東西1.7m以上、南北1.0m以上、深さ0.2mである。埋土は黒色砂泥で、完形の土師器皿が出土した。土坑18と類似する。

1区土坑109 調査区北東の東壁際で検出した土坑である。東半は調査区外に延びる。平面形は直径約2.0mの円形を呈し、深さ0.1mで浅い。埋土は黒色砂泥の炭層である。

2区溝57 調査区中央北側で検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は1.1mで北へ延びる。幅0.5m、深さ0.1mで0.1~0.3m大の石が詰まっている。建物の雨落ち溝と考えられる。

2区溝6 調査区の西側で検出した東西方向の溝である。東側は攪乱される。検出長は3mで、西へ延びる。幅0.4~0.5m、深さ0.15mで、0.1~0.2m大の河原石が充填されている。建物の雨落ち溝と考えられる。

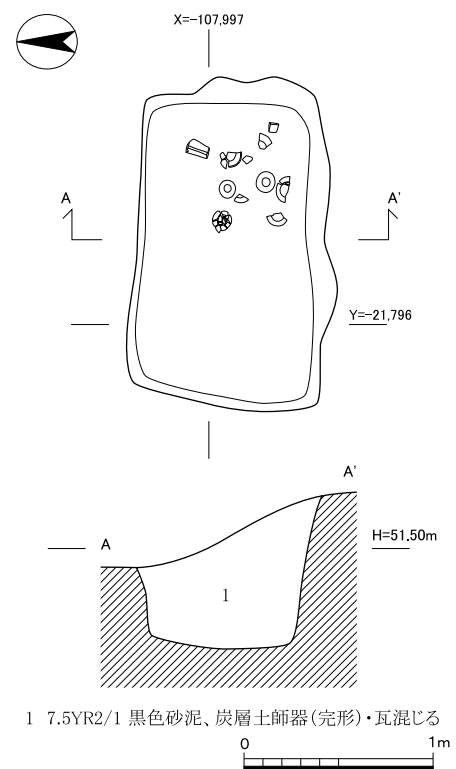


図10 1区土坑18実測図(1:40)

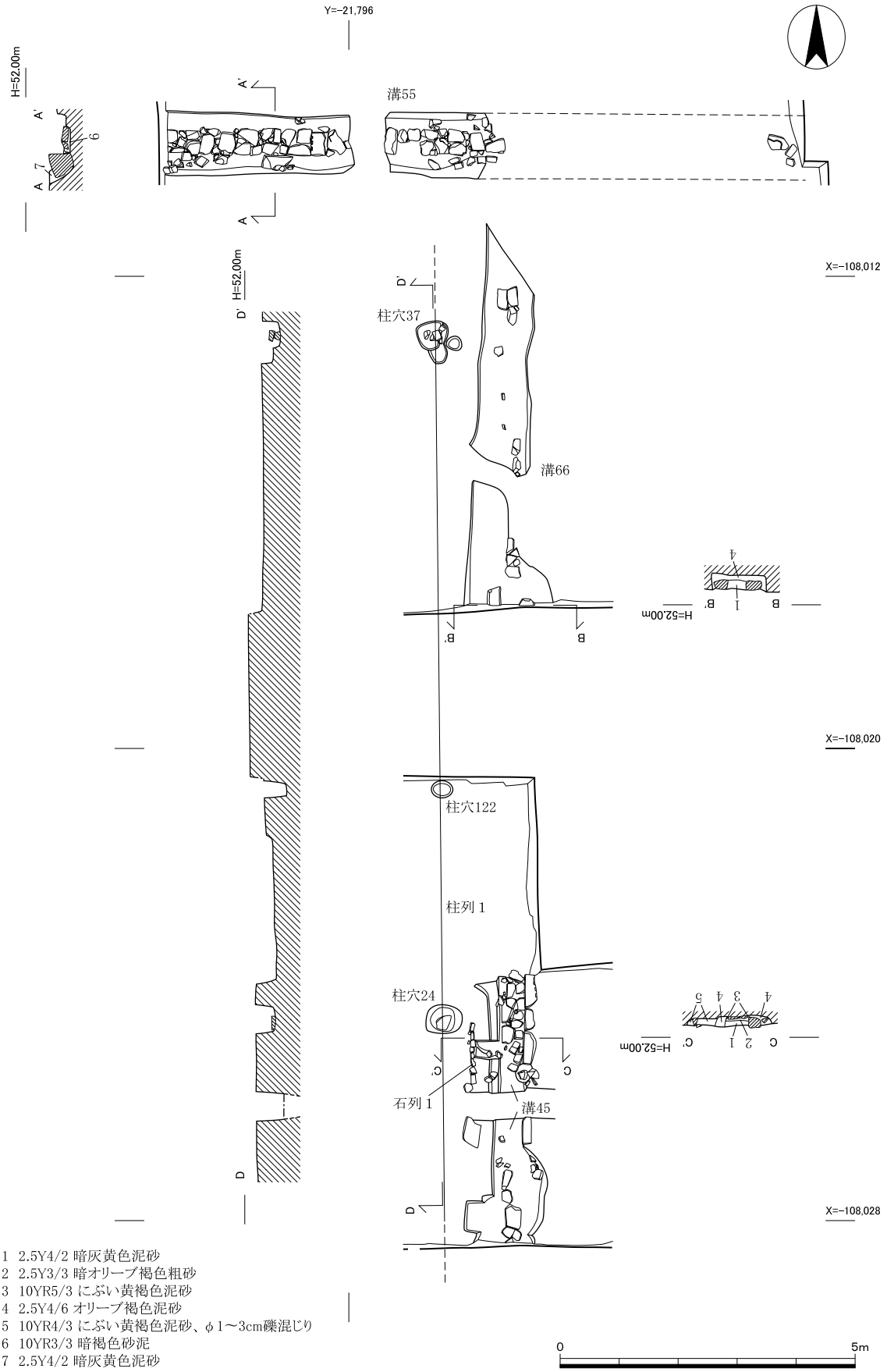


図11 1区溝55・66、2区溝45、1・2区柱列1実測図(1:100)

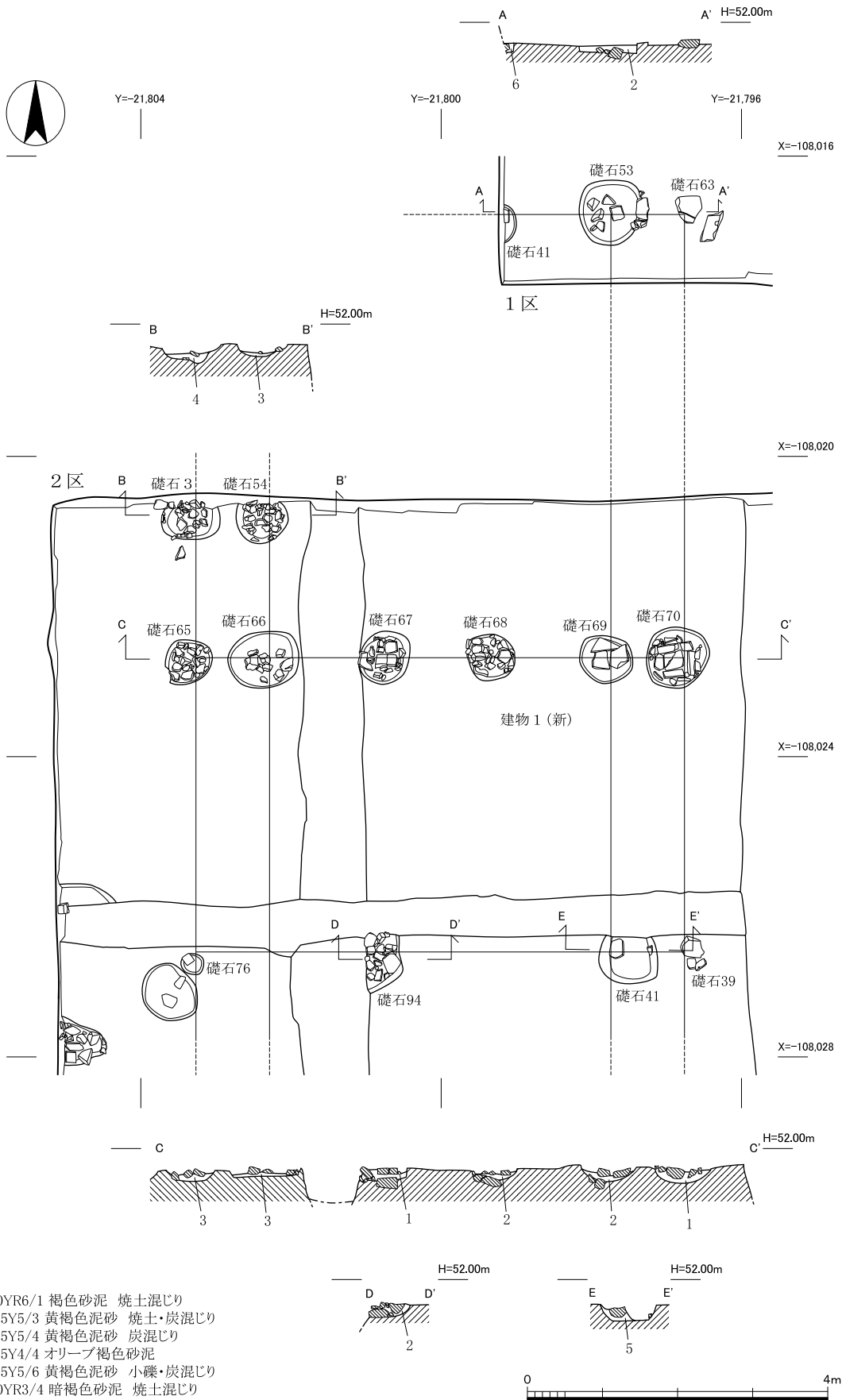


図12 1・2区建物1（新）実測図（1：80）

2区集石85 溝57の南で検出した集石である。東西0.7m、南北0.8m、深さ0.2mで、0.1～0.15m大の河原石が詰まっている。雨水を浸透させ排水する施設であると考えられる。

1区溝55 (図11、図版2) 調査区の中央南寄りで検出した東西方向の石組溝である。東側は攪乱されていたが、西半の底部の石敷は残存していた。検出長は約10mで東と西に延びる。内幅は約0.45m、深さ0.25m、掘形幅約1.0mである。埋土の上層は埋め戻された際の黄褐色砂泥、下層は溝として機能していた際の堆積層の粗砂混暗灰色泥土である。

1区溝66、2区溝45 (図11、図版2) 1区から2区にかけて検出した一連の南北方向の石組溝で、北側は攪乱される。検出長は10mで北と南に延びへ延びる。掘形幅は0.9m、内法0.45m、深さ0.2mである。1区は石組のほとんどは抜き取られ、一部に側石の一段目と底部の石敷が残存するだけである。2区では底部に花崗岩の割り石を敷き詰め、東側面は花崗岩の切石を並べているが、西側は抜き取られて残存しない。埋土は2層で、上層が埋め戻された際の暗灰黄色泥砂、下層が溝として機能していた際の堆積土の暗オリーブ褐色粗砂である。

1・2区路面1 (新) 1区は溝66の東側で検出したが、大部分が攪乱される。2区は溝45の東側で検出した。1～2cm大の礫と砂泥で叩き締められている。少なくとも路面を3面確認しており、下層の路面1 (旧) は寛政度内裏の遺構群である第2面にも伴う。

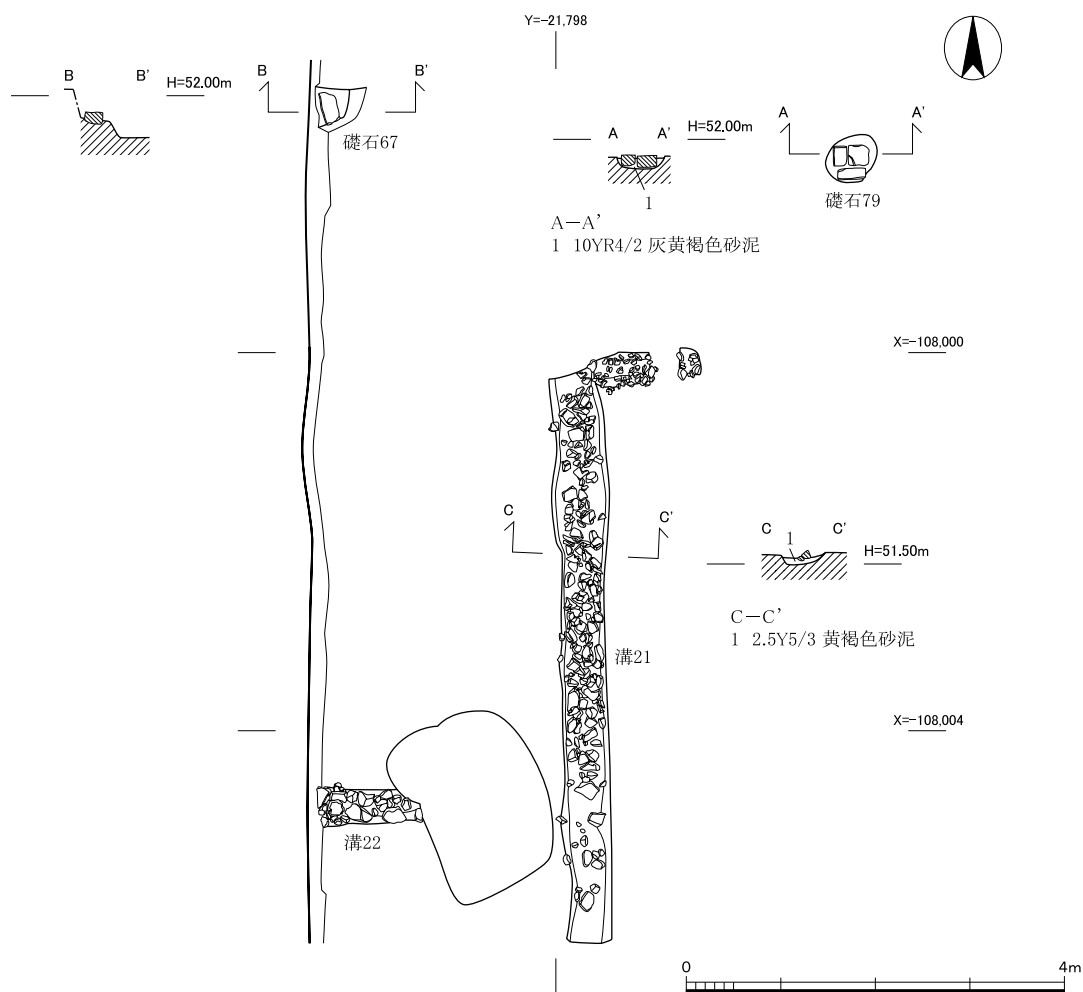


図13 1区溝21・22、礎石67・79実測図 (1 : 80)

2区石列1 (図11) 石組溝45の西側で検出した、南北方向の花崗岩切石列である。花崗岩の切石は15cmほどで、7石が南北方向に並ぶ。検出長は約1mで、掘形を持たない。

1・2区柱列1 (図11) 1区溝66、2区溝45の西際で検出した南北方向の柱列で

ある。直径0.3～0.4mの柱穴が3基、南北に並んでおり、柱間は南から柱穴24と柱穴122間は約4m、柱穴122と柱穴37間は約8mである。

1・2区建物1 (新) (図12、図版2) 調査区の西寄りで検出した南北棟の礎石建物で、礎石の据付け穴と礎石を計15基検出した。東西は約6.6m、南北は10m以上で、南側は調査区外に延びる。1区では北側と東側には展開しないことから、建物の北東隅にあたると思われる。南北5間以上、東西3間で、東側と西側に幅約1.0mの縁が付く。据付け穴の掘形は直径約0.8m、深さ0.1～0.2mで、根石は花崗岩の切石と河原石が用いられている。

1区溝21・22 (図13) 1区の中央部と中央部西端で溝を2条検出した。溝21の東側は攪乱され、全体形は不明であるが、検出範囲では平面形は「鍵」形を呈する。検出長は延べ7.6mである。溝22は東西溝で、東側は攪乱される。検出長は1.1m以上で、西側は調査区外に延びる。両溝とも幅約0.5m、深さ0.1mで、断面形は「U」字形で、埋土には5～20cm大の河原石が詰まっている。建物の雨落ち溝と考えられ、建物の南東隅を示す遺構である可能性が高い。

1区礎石67 (図13) 調査区の北西寄りで検出した礎石で、長辺35cm、短辺20cmの花崗岩の切石である。

1区礎石79 (図13) 調査区の北東寄りで検出した礎石で、直径0.5m、深さ0.15mで方形の掘形に一辺20cm、30cmの長方形の花崗岩の切石が3石据えられる。

1区石列76 (図14) 1区の北東で検出した南北方向の石列である。20～50cmの花崗岩の切石が3石南北方向に並ぶ。東肩部以外は攪乱されているが、形態から石組溝の可能性はある。

1区土坑35 1区の南寄りで検出した土坑である。南北3.1m、東西1.6mの方形で、深さ0.3以上である。埋土は暗オリーブ褐色泥砂で炭が大量に混じり、完形品を含む土師器皿が多量に出土した。

(3) 寛政度内裏前後の遺構 (第2面) (図15、図版3)

1・2区路面1 (旧) 路面1 (新) の下層で検出した。小礫と炭混じりの砂泥層を敷き詰めた堅固な面である。

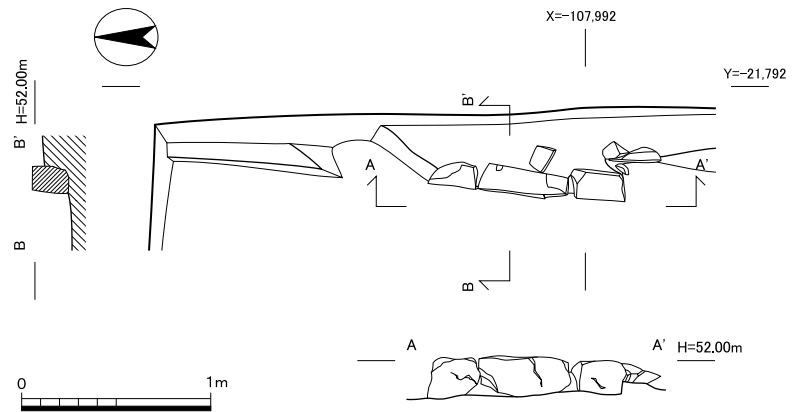


図14 1区石列76実測図 (1:40)

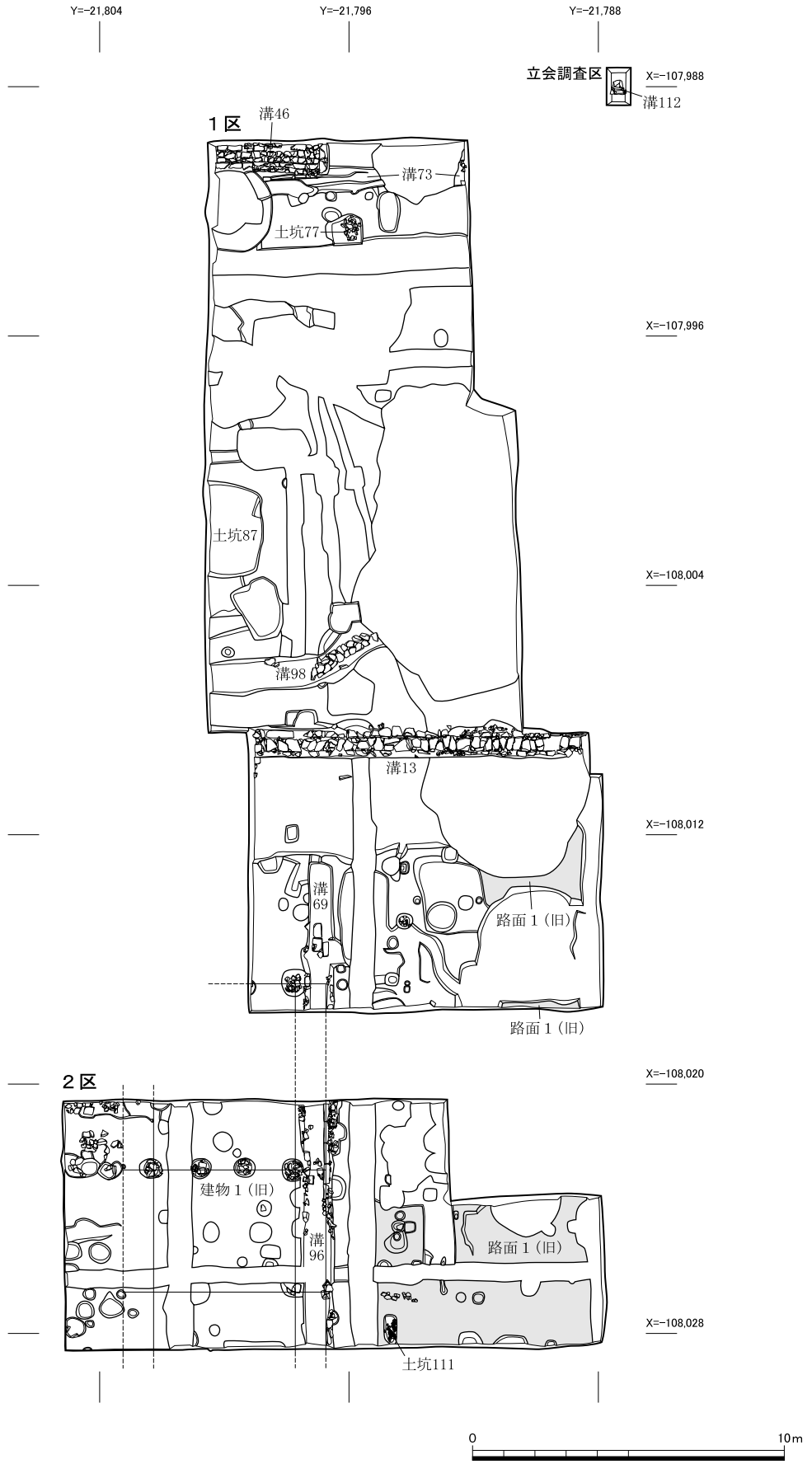
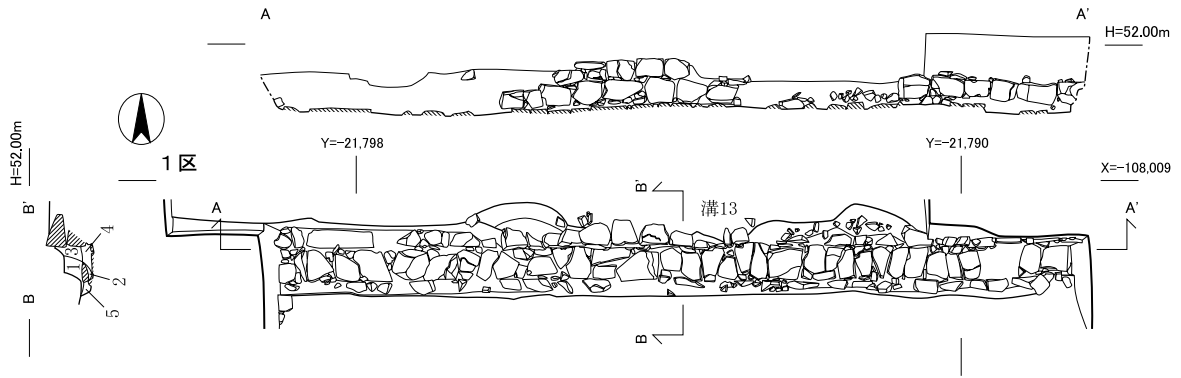


図15 第2面遺構平面図 (1 : 200)



- B-B'
- 1 10YR4/2 にぶい黄褐色砂泥
 - 2 10YR3/2 黒褐色砂泥
 - 3 10YR3/4 暗褐色泥砂、焼土混じり
 - 4 5YR3/2 オリーブ褐色粗砂
 - 5 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂

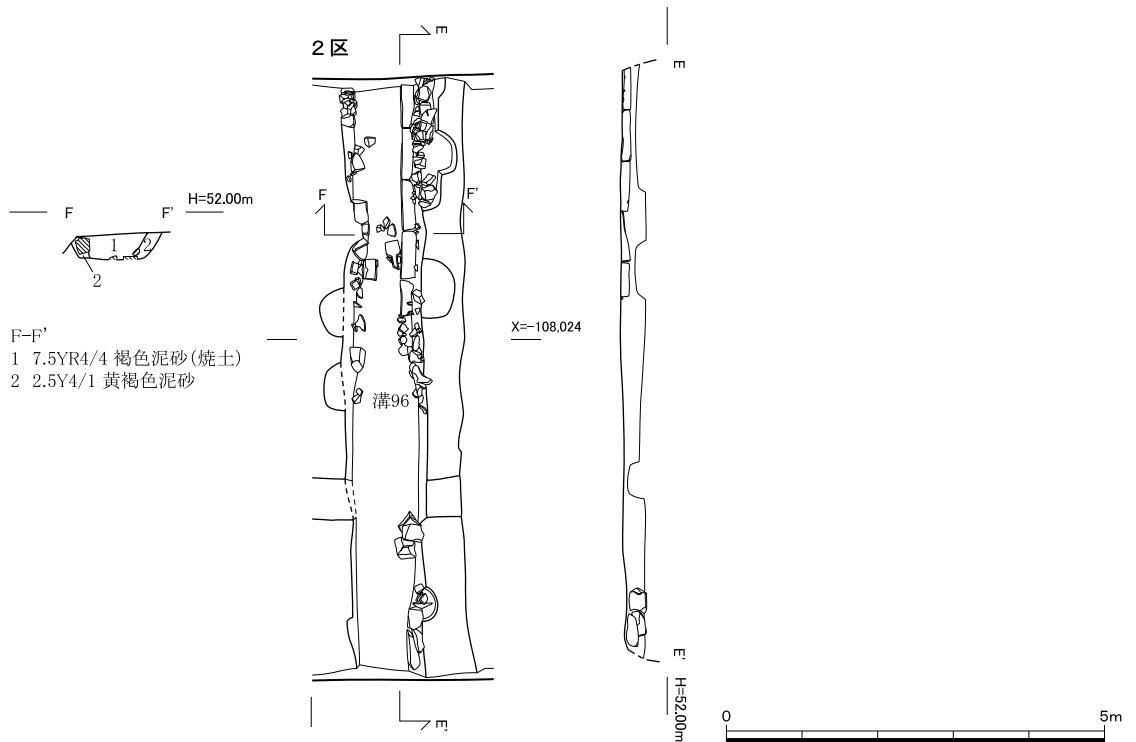
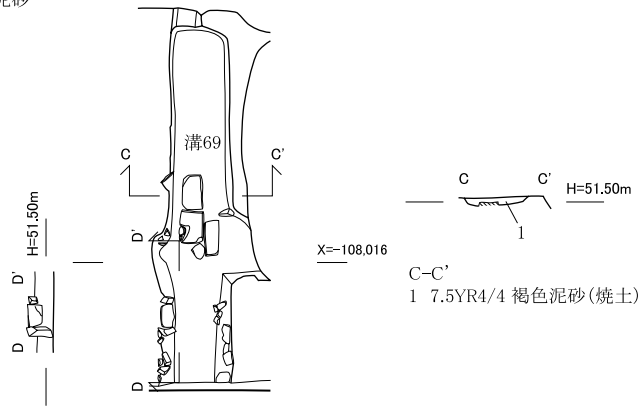


図16 1区溝13・69、2区溝96実測図 (1 : 100)

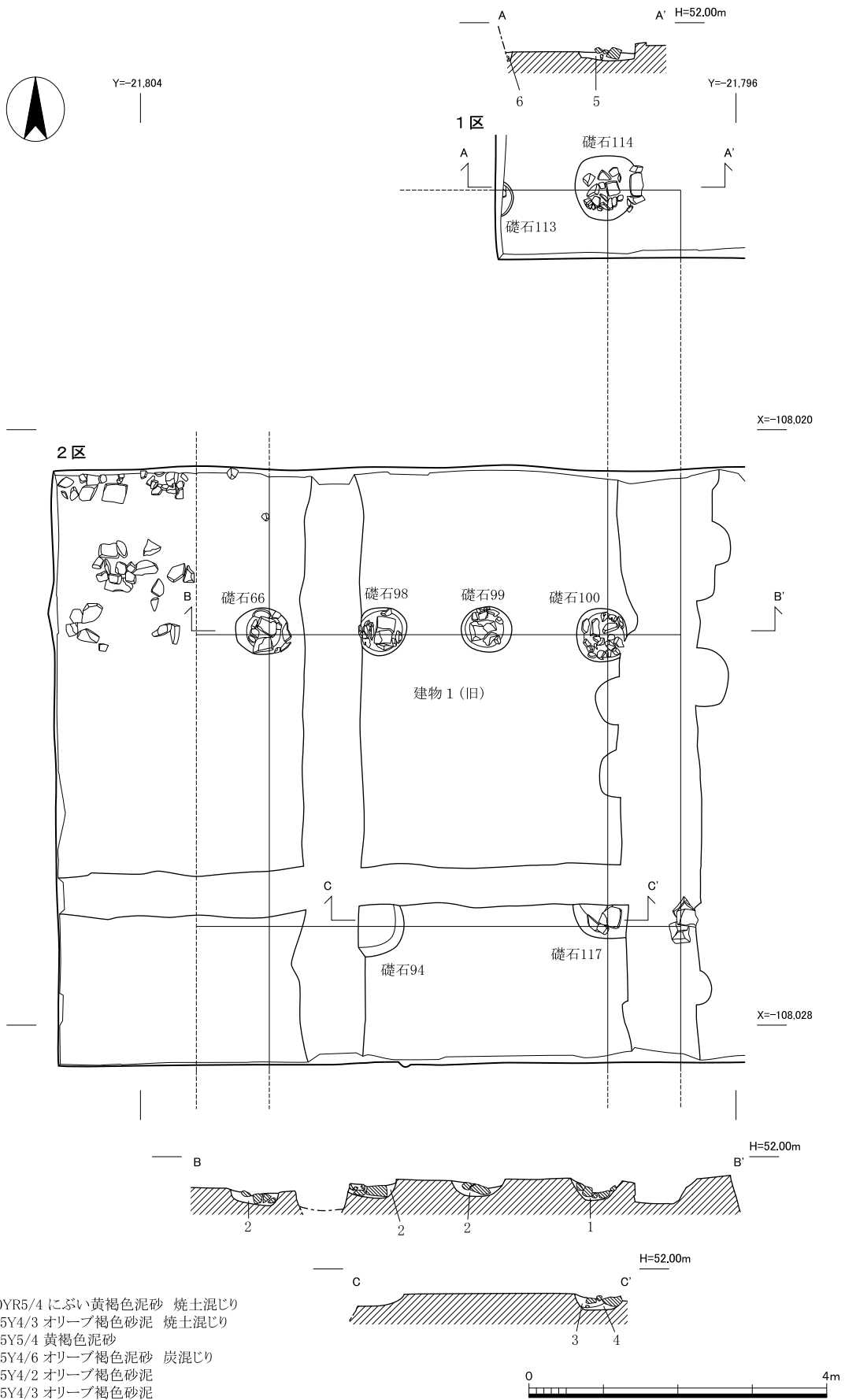


図17 1・2区建物1 (旧) 実測図 (1 : 80)

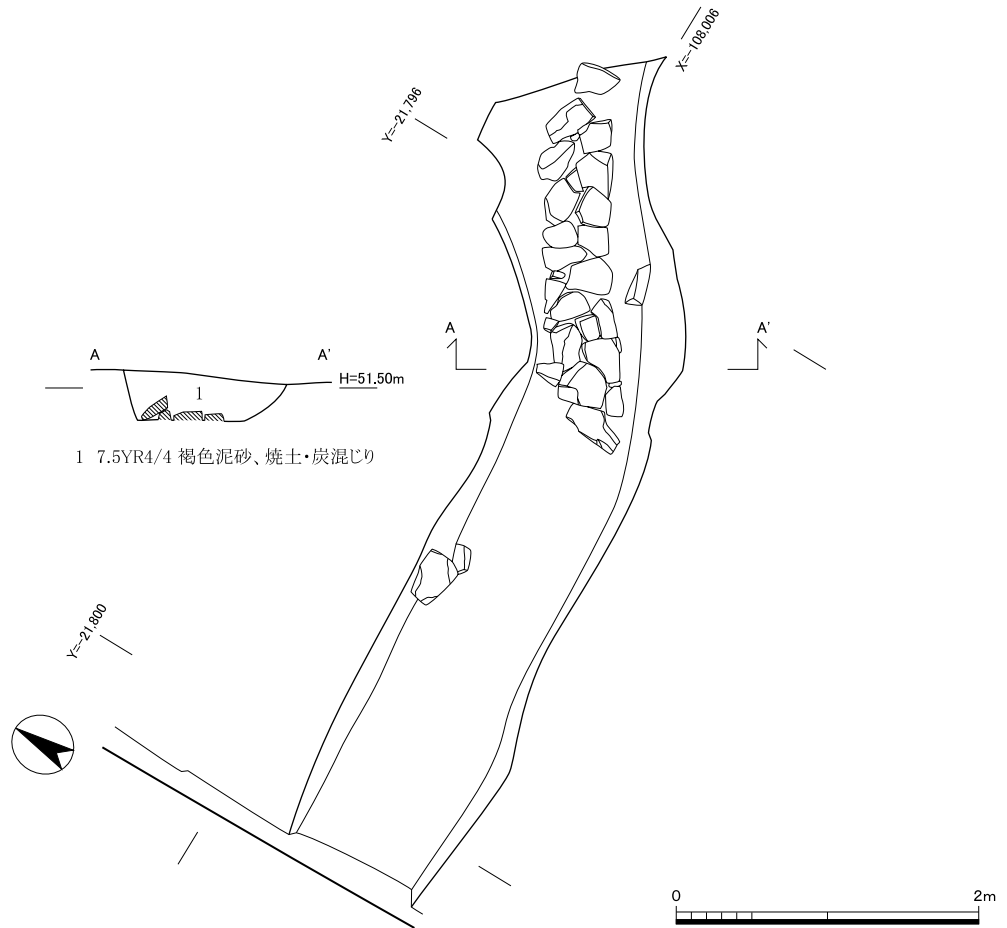


図18 1区溝98実測図 (1:50)

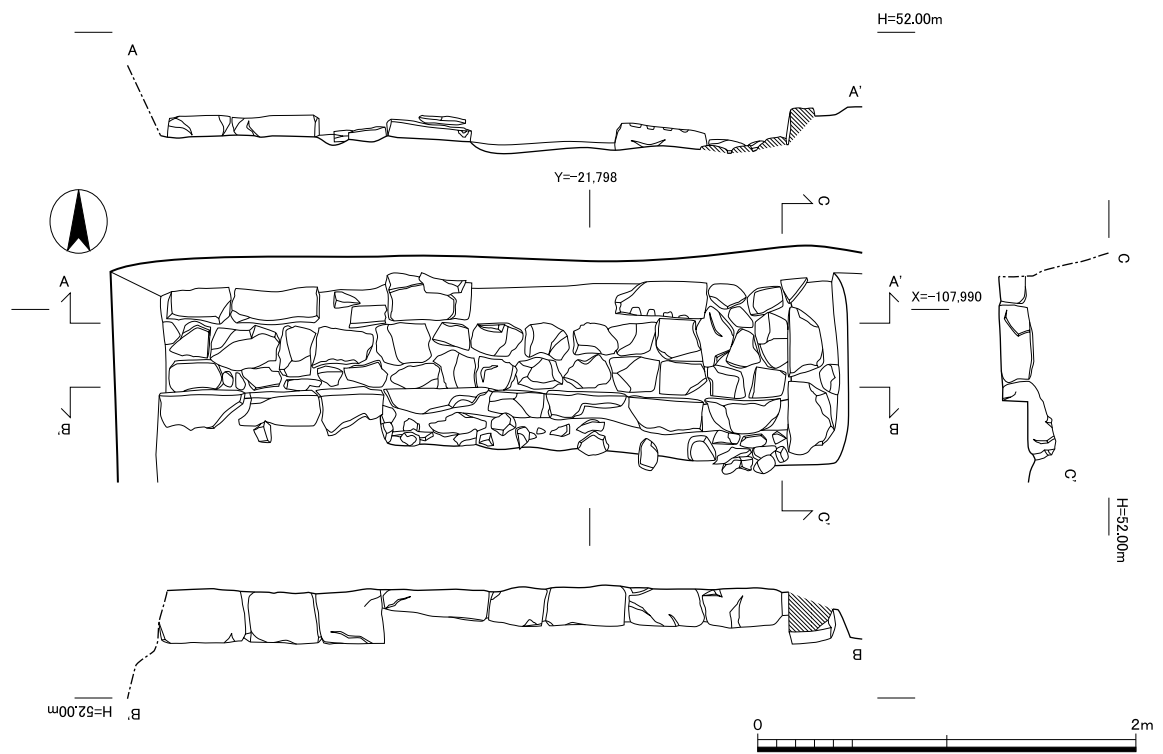


図19 1区溝46実測図 (1:40)

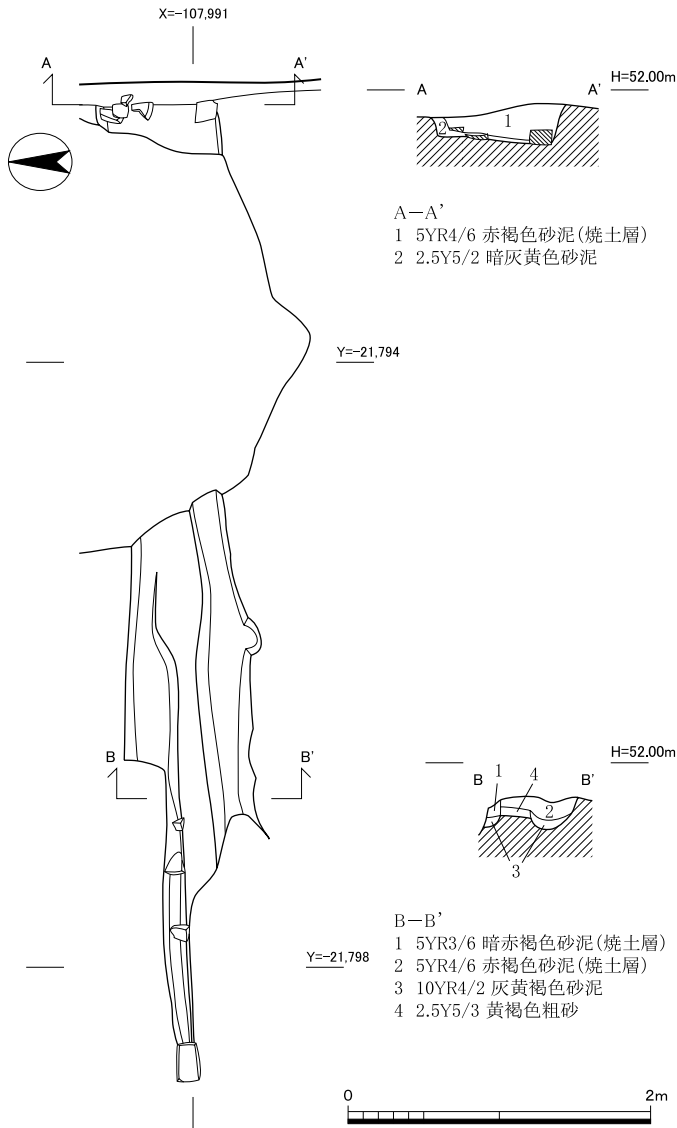


図20 1区溝73実測図(1:50)

1区溝13(図16、図版4) 調査区中央で検出した東西方向の石組溝である。検出長は11m、内法0.5~0.6m、掘形幅1.1m、深さ0.6mである。側石は0.3~0.6mの花崗岩で積まれ、1ないし2段目の石組と底部の敷石は残存するが、南肩は攪乱される。埋土の上層は焼土層で、下層は溝堆積層のオリーブ黒色粗砂である。

1区溝69、2区溝96(図16、図版4) 1区南西隅から2区中央で検出した、一連の南北方向の石組溝である。2区南側は調査区外に延び、1区北側は攪乱されている。検出長は12.7m、掘形幅1.0m、内幅は0.4~0.5m、深さ0.15~0.2mである。石組は0.4~0.6mの花崗岩の切石で、1区はほとんど抜き取られており、側石の1段目と底部の敷石が一部残存するだけである。2区も1段目の石が一部のみ残存する。底部の敷石は抜き取られている。第2面で検出したが、建物1(旧)の据え付け穴が溝を埋めた後に穿た

れていることから、寛政度内裏造営以前の石組溝である。埋土は褐色砂泥の焼土層である。

1・2区建物1(旧)(図17、図版5) 建物1(新)の礎石据え付け穴と同位置で根石群を数箇所検出しており、建物1(新)と同規模の礎石建物が下層に存在したと想定できる。建物1(新)の根石群との間には焼土層が存在することから、建物1(旧)は一度被災し、同位置・同規模で建物1(新)が再建されたと考えられる。

1区溝98(図18、図版4) 1区中央の西寄りで検出した石組溝である。西壁から東へ3mのところ北東方向に曲り、約2.5mで攪乱される。石組は抜き取られ、一部底部の敷石が残存するだけである。検出長は5.5m、掘形1.0m、深さ0.35mである。埋土は黒褐色泥土である。

1区溝46(図19、図版5) 1区北壁沿いで検出した石組溝で、上部は攪乱される。西壁から約3.5m東の地点で北へ曲がり調査区外になる。石組は花崗岩の切石で、側石は1段目のみで、底部の石敷は完存する。内幅0.45m、深さ約0.2mである。埋土の上層は黄褐色砂泥、下層は溝堆積層の暗灰黄色粗砂である。

1区土坑77 1区北側で検出した土坑で、南側は埋設管で攪乱される。一辺1.0m、深さ0.35mの方形で、底には0.1～0.2m大の河原石が詰まる。埋土は暗赤褐色砂泥の焼土層である。

1区土坑87 1区中央西壁沿いで検出した。西側は調査区外に延びる。南北3.1m、東西1.6m以上、深さ0.5m以上である。埋土には0.3～0.6m大の花崗岩の切石が多量に廃棄されていた。石室の可能性はある。

2区土坑111 (図21、図版5) 2区南東寄りで検出した土坑である。南北1.9m、東西0.45mの隅丸方形で、深さ0.3mである。埋土は焼土・炭混じりの暗灰黄色粗砂で、土師器皿などが多量に出土した。

1区溝73 (図20、図版5) 調査区の北で検出した東西方向の石組溝である。検出長は4.0m、内幅は0.2～0.3m、掘形幅は0.8m、深さ0.2mで、東と西側は調査区外に延びる。石組はほとんど抜き取られており、東壁に南側石の花崗岩の切石が残存するのみである。埋土は暗赤褐色砂泥の焼土層と溝堆積土の黄褐色粗砂である。

立会調査溝112 (図9、図版5) 水道管の切回し工事に伴う立会調査で検出した、東西方向の石組み溝である。南側は攪乱されている。掘削幅が狭く、北側石が1石と底の敷石3石である。石材は0.2～0.4m大の花崗岩である。埋土は焼土層で、遺物は出土していないが天明の火災に伴う遺構と考えられる。

(4) 宝永度内裏前後の遺構 (第3面) (図22、図版6)

1区焼土面 調査区南側の一部で検出した、にぶい赤褐色の焼けて強く締まった面である。

1区集石100 調査区南東寄りで検出した。直径0.5mの円形で、5～10cmの石が詰められている。

1区集石102 調査区南寄りで検出した。一辺0.6mの方形で、10cm前後の石が詰められている。

1区集石群115 調査区の中央部と北東側で検出した。直径が0.3～1.1mで形状も不定形である。石も10～60cm大の花崗岩や河原石で規則的な並びが見られない。整地層内に入れられた石と考えられる。

2区建物2 2区の西側で検出した建物の基礎である。「L」字形に幅約0.6mの溝が巡る。南北7m以上、東西3m以上で、深さ0.3m以上である。埋土は0.1～0.2m大の河原石と粗砂層が交互に整地されている。

2区整地層 建物2の内側で検出した。石組溝などに使われた花崗岩の切石や河原石が錯乱した状態で出土しており、不要になった石を廃棄して整地したものと考えられる。

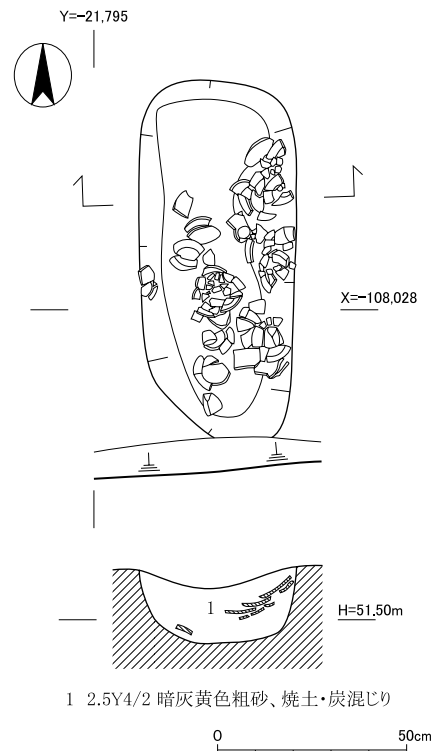


図21 2区土坑111実測図 (1:20)

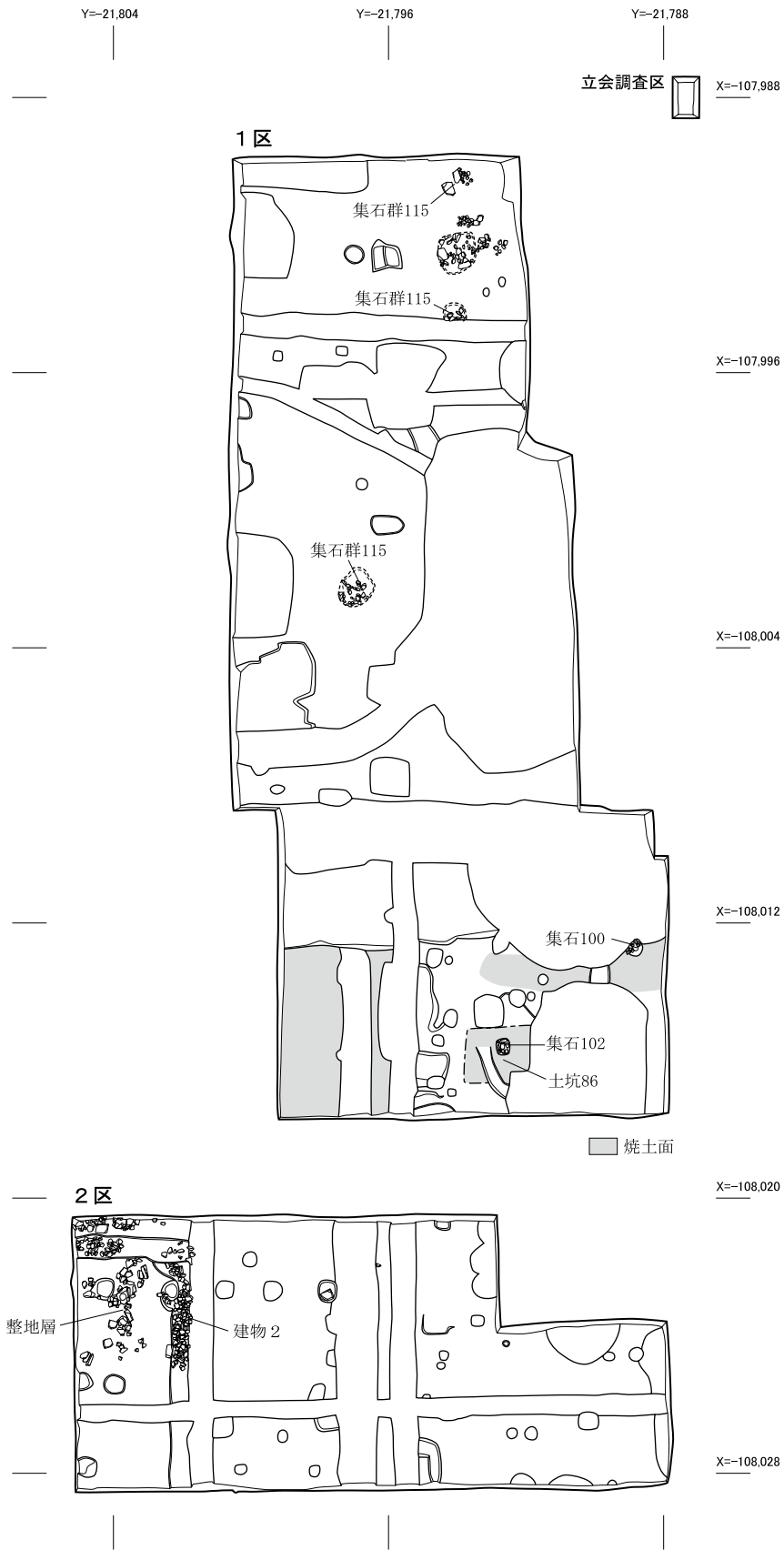


図22 第3面遺構平面図 (1 : 200)

3. 遺 物

出土した遺物は整理箱にして41箱で、その内訳は土器類35箱で瓦類が6箱である。出土した遺物は江戸時代中期から明治時代初期のものである。

内容は土器類ではほとんどが土師器皿で、次いで肥前の染付、京焼系の施釉陶器がある。瓦類では軒瓦・棟丸瓦・軒棧瓦などが出土している。少量であるが銭貨、石製品、金属製品、食物残渣とみられる貝殻も出土している。

記述は時代の新しいものから順に報告する。なお、出土遺物の時期は京都の土器編年¹⁾に準じた。

(1) 土器類 (図23～26、図版7～9)

江戸時代末期から明治時代初期の土器 (XIV期古～中、19世紀前半から中頃)

1区土坑18(図23、図版7) 土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器、瓦などが出土した。1～7は土師器皿Sで口径8.7～12.4cm、器高1.4～1.9cmである。体部は大きく開き、口縁部は屈曲し口縁は丸くおさまる。口縁が上方するものもある。8は肥前染付で底部からやや丸み気味に立ち上がる。外面体部には草花文様が施される。器壁は肉厚である。XIV期中、19世紀中頃に属する。

1区土坑19(図23、図版7) 土師器、染付、瓦などが出土した。9～12は土師器皿Sで口径9.5～11.8cm、器高1.4～1.9cmである。器高は低い。体部は大きく開き、口縁部が内傾するものが多い。13は蓋で口径13.8cm、外面天井部につまみが付くが欠損している。外面口縁部から天井部までナデ調整が施される。XIV期中に属する。

1区土坑109(図23) 土師器、瓦、金属などが出土した。14・15は土師器皿Sで口径10.4cm・11.4cm、器高1.9cm・1.4cmである。底部凹線から体部は屈曲して開き、口縁部は内傾して端部は丸くおさまる。14は器壁が肥厚する。XIV期中に属する。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	銭貨		銭貨1点		
江戸時代前期～中期	土師器、土師質土器、施釉陶器、染付、土製品、瓦		土師器17点、土師質土器1点、施釉陶器2点、染付1点、土製品2点、瓦9点		
江戸時代後期	土師器、土師質土器、染付、施釉陶器、土製品、瓦、銭貨		土師器12点、土師質土器1点、土製品1点、瓦1点、銭貨2点		
江戸時代末期～明治時代初期	土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、染付、土製品、窯道具、瓦、銭貨、石製品		土師器46点、土師質土器2点、施釉陶器2点、焼締陶器1点、染付6点、土製品1点、窯道具1点、瓦17点、銭貨1点、石製品2点		
合計		50箱	129点(9箱)	0箱	41箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より9箱多くなっている。

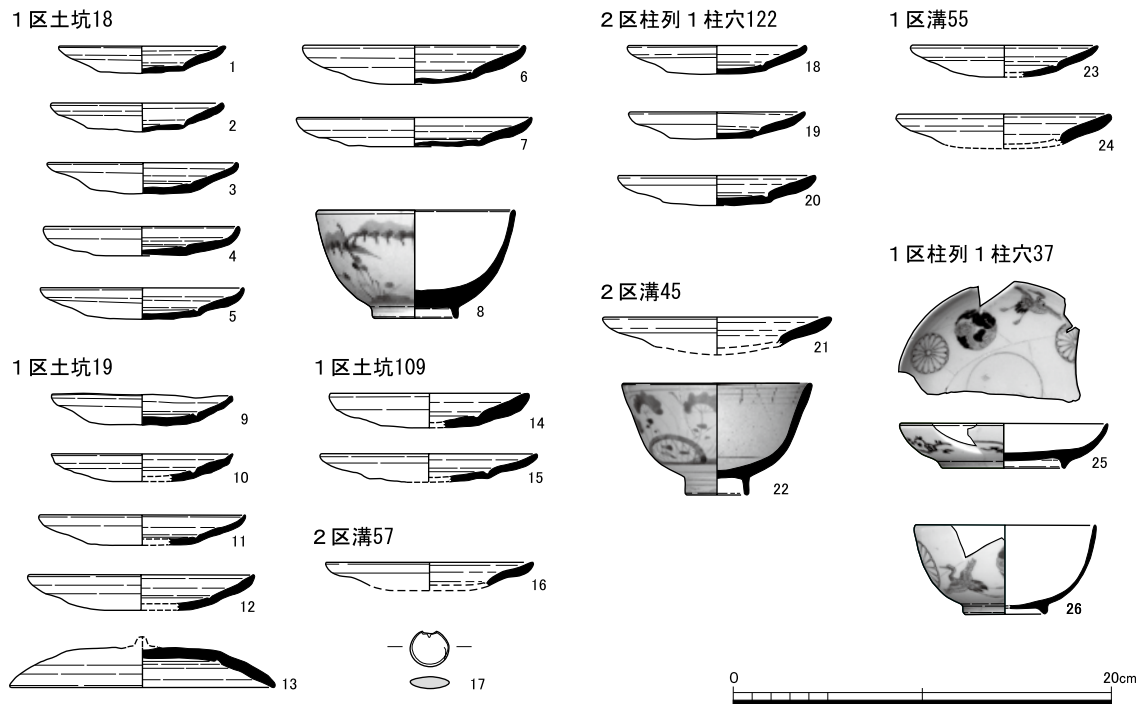


図23 土器実測図1 (1 : 4)

2区溝57(図23、図版9) 土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器、瓦などが出土した。16は土師器皿Sで口径10.8cmである。体部は屈曲して外へ開き、口縁部は内傾し端部は尖る。17は土師質の土製品で直径20.1cm、厚さ0.65cmで円盤状を呈しており、土製の基石と思われる。XIV期中に属する。

2区柱列1柱穴122(図23) 土師器、染付、施釉陶器、瓦などが出土した。18～20は土師器皿Sで口径9.3～10.3cm、器高1.5～1.6cmである。底部はやや丸味をもち、体部は外へ開き、口縁部は内傾し端部は丸くおさまる。XIV期中に属する。

2区溝45(図23) 土師器、施釉陶器、瓦などが出土した。土器は小片が多く、図示できたのはわずか2点である。21は土師器皿Sで口径11.8cm。体部はやや屈曲して外へ開き、口縁部はやや内傾して端部は丸くおさまる。22は肥前染付碗でやや高い高台を持ち、底部から体部は丸味を持って立ち上がり、中位で口縁部は外へ開く。外面体部には草花文、口縁部内面には四重線が巡り、見込みにも文様が施されている。XIV期古～中に属する。

1区溝55(図23) 土師器、施釉陶器、瓦、金属などが出土した。23・24は土師器皿Sで口径9.7cm・11.1cm、23は器高2.2cmである。体部はやや屈曲して開き、口縁部は内傾して端部は丸くおさまる。XIV期中、19世紀中頃に属する。

1区柱列1柱穴37(図23) 土師器、染付、施釉陶器、瓦などが出土した。25は染付皿で口径10.7cm、器高2.4cmである。26は染付碗で口径9.6cm、器高4.7cmである。25は見込みに、26は外面に鶴、丸文、十六弁菊の丸文が施されている。作りは丁寧で器壁も薄く仕上げられている。これらは禁裏から伊万里(肥前)注文された製品である。²⁾XIV期古～中に属する。

1区土坑35(図24、図版7・9) 土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器、土師製品、瓦、金属な

どが多量に出土した。27～36は土師器皿Sで口径9.5～14.4cm、器高1.8～2.1cmである。底部が丸味をもち、内面凹線の位置が体部側へ上がるものが多く見られる。底部と体部との境が不明瞭となる。口縁部も内傾するものが見られる。37～41は土師器蓋で口径11.8～14.7cm、推定で器高2.0～2.5cmである。皿につまみを付けたものであるが、外面はナデ調整が施されている。また、この時期のつまみの位置は中心からずれているのが目立つ。42・45は京焼系の施釉陶器である。42は平茶椀で口径12cm、器高3.9cmである。浅いオリーブ色の釉が施され、見込みには錆絵で草花文が施される。高台内に墨書がある。45は鉢の蓋で径9.6cm、高さ0.9cmである。淡いオリーブ色の釉が施される。43は染付椀で口径8.3cm、器高2.7cmである。見込みには蝶と鳥の文様が施される。44は焼塩壺の蓋で口径5.3cm、器高1.8cmである。内外面ともナデ調整を施される。46は窯道具の三足トチンで直径約5.9cm、厚さ0.5cmである。47は土師質土器の焙烙で口径28.8cm、器高5.8cmである。48は肥前染付皿で口径12.8cm、器高3.2cmである。外面には唐草文、内面には草花文、見込みには五

1区土坑35

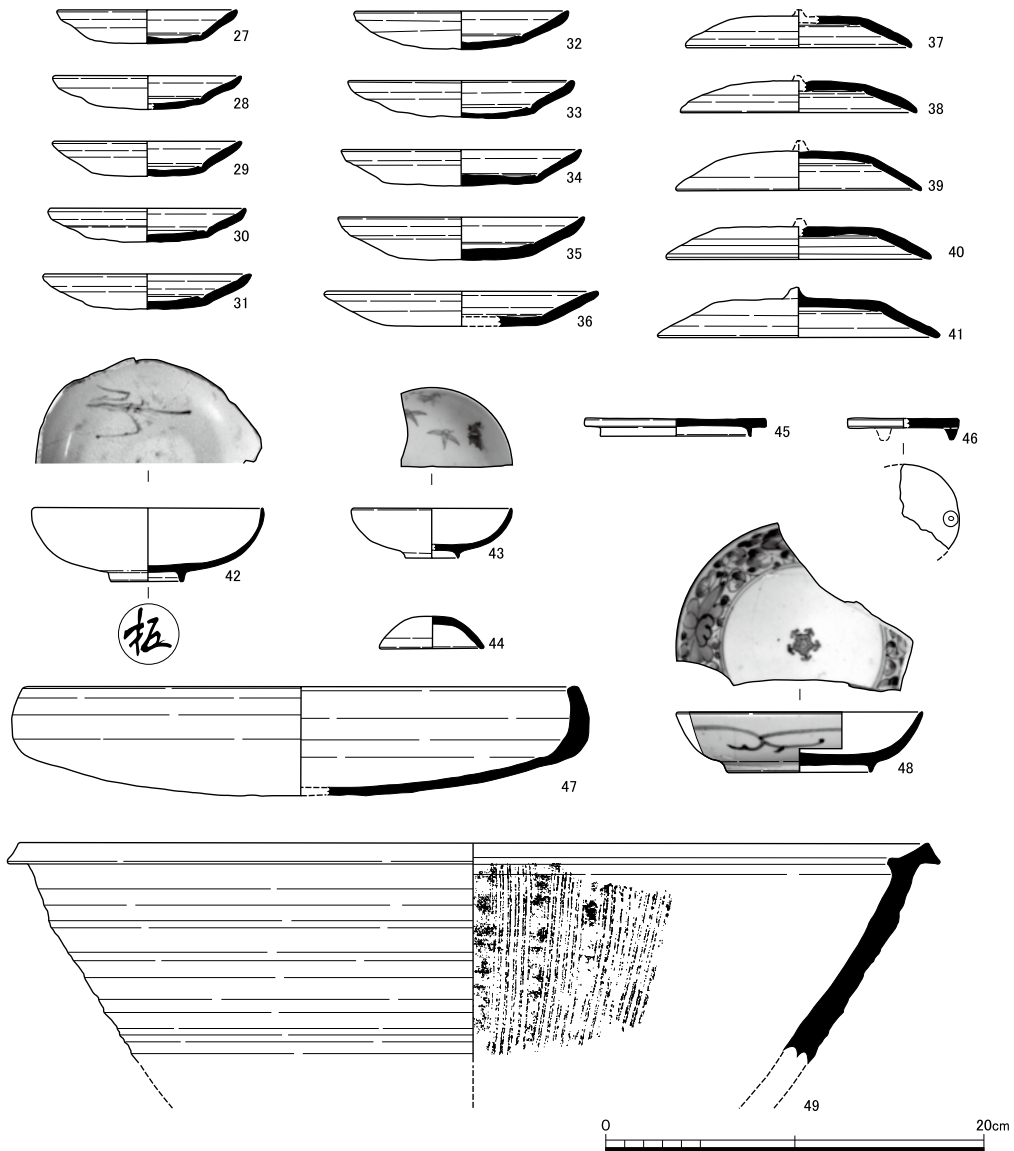


図24 土器実測図2 (1:4)

弁花が施される。49は信楽播鉢で口径48cmである。口縁部は「く」字に屈曲する。内面の播目は一単位5本である。全面に鉄泥が塗られている。87～96（図版9）は土師器皿で内面に墨書があり、「か」・「と」・「返」・「井」と断片的しか判読できない。XIV期古に属する。

江戸時代後期から末期（XIII期中～新、18世紀後半から19世紀前半）

1区溝13（図25） 土師器、染付、施釉陶器、瓦などが出土した。50～52は土師器皿Sで口径11.3～12.9cm、器高1.7～2.0cmである。丸味のある底部から体部は外へ開き、内面凹線は体部側に上がり口縁部は内傾し、端部は丸くおさまる。器壁はやや薄い。XIII期中に属する。

2区溝96（図25、図版9） 土師器、染付、施釉陶器、金属、貝、軒瓦、瓦、壁土などが出土した。53～58は土師器皿Sで口径10.8cm～11.8cm、器高1.7～2.2cmである。底部は丸味をもち、体部は外へ開き、口縁部端部は丸くおさまる。内面凹線は体部側に上がり、口縁部が内傾するもの見られる。59は京都産の焼塩壺で器高6.5cm、円柱状の粘土塊に、棒状の器具を差し込んで形を作り、

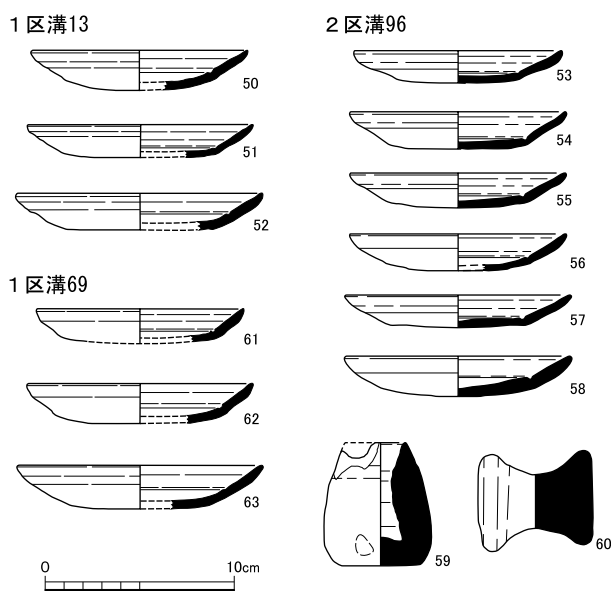


図25 土器実測図3（1：4）

口縁部内外面は横ナデ、体部外面はナデ調整が施される。60は土師質の組紐錘で器高6.1cmである。胴部が窪み、胎土は砂粒混じりで粗い。全面にナデ調整が施される。XIII期中に属する。

1区溝69（図25） 土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器、軒瓦、瓦などが出土した。61～63は土師器皿Sで口径10.8～12.8cm、器高（1.9～2.4cm）である。底部は丸味をもち、内面凹線は体部側に上がる。61・62の体部は短く、やや屈曲ぎみに外へ開き、口縁はやや尖る。XIII期中に属する。

江戸時代前期から中期（XII期新～XIII期古、17世紀から18世紀）

1区溝46（図26、図版8） 土師器、染付、焼締陶器、瓦などが出土した。64・65は土師器皿Sで口径11.4cm・11.8cm、器高2.0cm・2.1cmである。底部は丸味をもち、体部は外へ開くものとやや屈曲して開くものがある。口縁はやや尖る。XIII期古に属する。

2区土坑111（図26、図版8） 土師器、染付、施釉陶器、土製品、瓦などが出土した。66～78は土師器皿Sで口径9.8～12.3cm、器高1.8～2.2cmである。底部は丸味をもち、凹線は体部側に上がり、体部は外へ開いて口縁は尖る。体部が内弯するもの、屈曲して立ち上がるものなどばらつきがある。79・80は土師器蓋で口径12.0cm・12.9cmである。つまみは欠損する。外面口縁部から天井部はナデ調整が施される。81は土製品の鳥形で残長4.6cm、高さ3.1cmである。羽には緑釉が施される。82は土製品のミニチュア播鉢で口径5.8cm、器高3.0cmである。播目は一単位3本である。胎土は赤褐色で透明釉が全面に施される。83は土師質土器の小壺で口径2.1cm、器高3.2cmである。体部

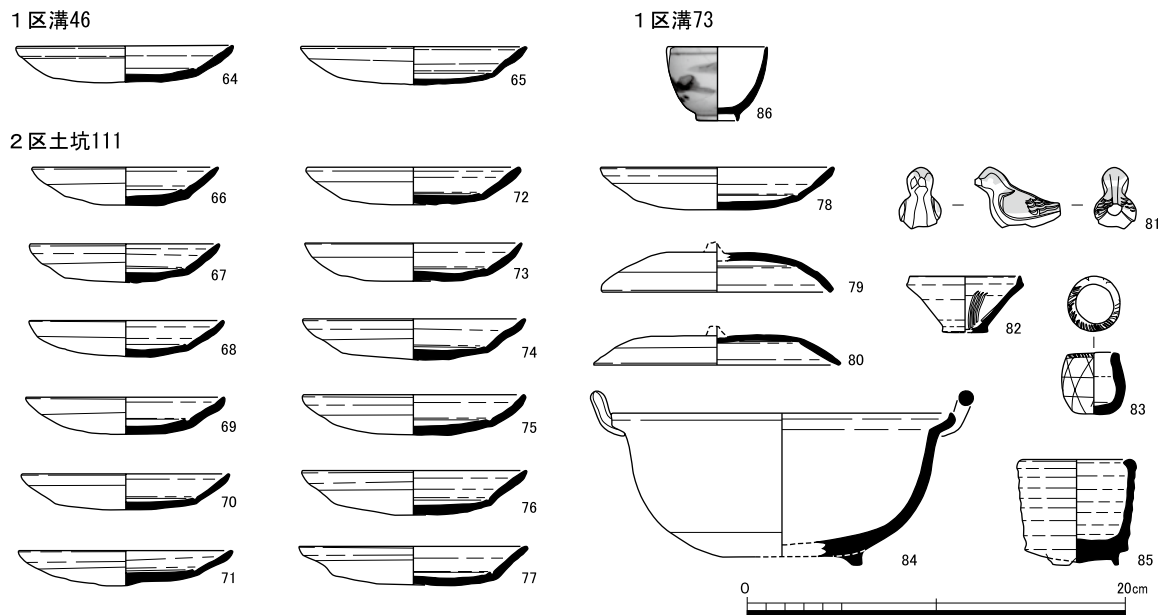


図26 土器実測図4 (1:4)

は内湾し、口縁部やや外傾し、端部は丸くおさまる。外面には斜格子文が線刻され、口縁上面にもきざみが入られている。84は京焼系の鍋で口径17.8cm、器高8.1cmである。把手、三足の脚が付く。鉄釉が内面と外面の腰部まで施される。85は京焼香炉で口径5.8cm、器高5.6cmである。3箇所足が付き、胎土は灰白色で密である。釉調はオリーブ灰色に透明釉が全面に施される。小ぶりでの手のひらに収まるサイズから聞香炉に使われていたものと考えられる。XIII期古に属する。

1区溝73(図26) 土師器、染付などが出土した。86は肥前染付小杯で口径5.2cm、器高3.9cmである。高台は薄く、やや内傾する。体部は内湾して立ち上り、口縁は尖る。外面には山水文が描かれる。肥前陶磁編年³⁾のⅢ期頃に比定される。XII期新～XIII期古に属する。

(2) 瓦類 (図27、図版10)

棟丸瓦 瓦1～8は菊花文の棟丸瓦で周縁を有する。瓦1～4は細い凹線弁8葉の一重菊、瓦5・6は細い凹弁10葉の一重菊、瓦7・8は細い凹弁12葉の一重菊。中房が直径1cm前後の凸状なのが瓦1～3・5～7、直径5mm前後の凸状なのが瓦4・8である。瓦当面にキラコが見られるのが瓦1・2・4～7である。瓦1・4は2区1面掘下げ、瓦2は1区溝16、瓦5は2区土坑6、瓦6は2区土坑78、瓦7は2区溝6、瓦8は1区溝55で、いずれも江戸時代後期から末期である。瓦3は1区溝69で江戸時代中期以降である。瓦9～12は菊花文の棟丸瓦で周縁を有する。瓦9は太い凸弁10葉の一重菊、瓦10～12は細い凸線弁16葉の一重菊。中房が直径1cm前後凸状なのが瓦9・10、直径5mm前後の凸状なのが瓦11・12。瓦12は周縁が太く、小さい。瓦9は1区2面検出、瓦10・11は1区土坑18で、瓦12は1区土坑19で、いずれも江戸時代後期から末期である。瓦13は菊花文の棟丸瓦で周縁を有する。凹線弁16葉の一重菊、中房は凹線である。1区1面検出中で江戸時代後期である。瓦14・15は菊花文の棟丸瓦で周縁が無い。凹線弁8弁の二重菊。瓦14は間弁が凸弁、瓦15は間弁が凸線である。瓦14は1区溝13、瓦15は1区1面検出から出土した。江戸時

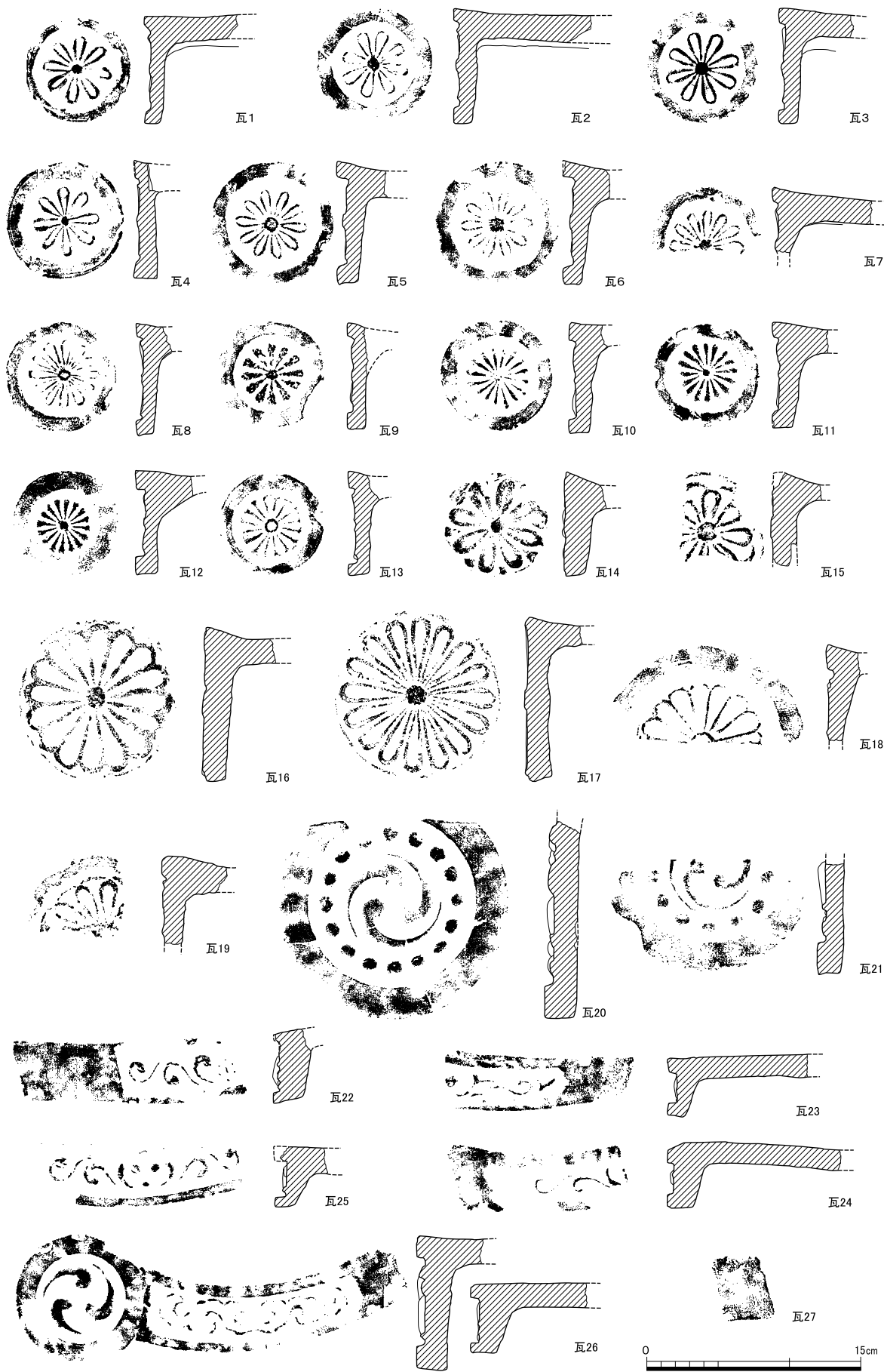


图27 瓦拓影·实测图 (1 : 4)

代前期以降。瓦16・17は菊花文の棟丸瓦で周縁が無い。瓦16は凹線弁16弁の一重菊、瓦17は凹線弁18弁の一重菊。中房はボタン状である。瓦16は1区土坑50、瓦17は1区土坑87から出土した。江戸時代前期以降。

軒丸瓦 瓦18・19は菊花文の軒丸瓦で周縁を有する。瓦18は凹線弁16弁の一重菊、瓦19は凹線弁12弁の一重菊。中房の中心が凹む。瓦18は2区攪乱、瓦19は2区土坑86から出土した。江戸時代前期から中期以降。瓦20・21は右巻込みの三巴文軒丸瓦。瓦20は珠文が16個、瓦21は珠文が13個である。瓦20は1区土坑109で江戸時代末期以降。瓦21は1区溝13出土で江戸時代中期以降。

軒平瓦 瓦22～25は軒平瓦で、文様は均整唐草文である。瓦22は2区ピット22、瓦23は1区土坑18、瓦24は1区1面掘下げ、瓦25は1区溝55出土。いずれも江戸時代後期以降である。

軒棧瓦 瓦26は軒棧瓦で、丸瓦当は右巻込みの三巴文、平瓦当は凹線均整唐草である。1区土坑17出土。江戸時代末期以降である。

隅瓦 瓦27は隅瓦の右端に長方形の圏線内に「ふかくさ □□衛門」と記された人名刻印。1区溝69出土、江戸時代中期。

(3) その他の遺物

銭貨 (図28、図版9) 出土したのは合計5枚で、判読できたのが4枚である。渡来銭が1枚、国内銭が3枚である。

銭1～3は「寛永通寶」で、銭1は1区1面検出、銭2は2区溝57、銭3は1区3面検出から出土した。

銭4は「紹聖元寶」で1094年の北宋。1区溝46出土。

石製品 (図29、図版9) 石1は黒色の基石で、ほぼ円形を呈する。直径1.8cm、厚さ0.5cm。1区第1面検出出土。江戸時代末期。

石2は白色の基石で、やや楕円形を呈する。直径1.6cm、厚さ0.6cm。2区ピット118出土。江戸時代末期。

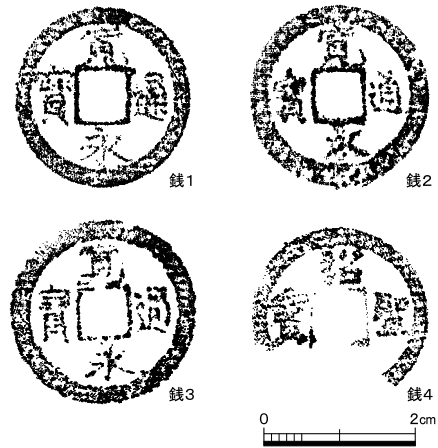


図28 銭貨拓影 (1 : 1)

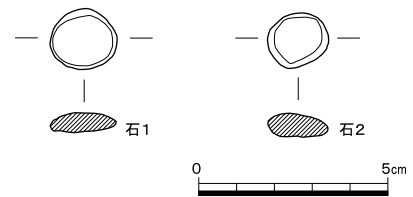


図29 石製品実測図 (1 : 2)

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
小松武彦「近世の土師器」『平安京左京北辺四坊』第2分冊(公家町)京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 2) 鈴田由紀夫「京都と伊万里焼」『冷泉家展 近世公家の生活と伝統文化』財団法人冷泉家時雨亭文庫、朝日新聞、株式会社アサツーディ・ケイ 2002年
- 3) 『九州陶磁器の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁器学会 2000年

4. まとめ

調査地は、清所門の北東側に位置している。この地が御所内に含まれたのは寛永度御造営（寛永十八年：1641）からである。これ以降、内裏は承応・万治・寛文・宝永・天明・安政年間の計6回火災によって焼失し、再建が繰り返された。今回の調査では、宝永五年（1708）の火災・天明八年（1788）の火災・安政元年（1854）の火災の焼土層と、その前後の遺構を検出した。

以下では、造営内裏指図¹⁾と検出した遺構との関係を比較検討しておく。とくに井戸は位置関係が理解しやすいため、最初に井戸47・7と井戸52を考察する。

『安政造営内裏指図』（図30）は、安政元年（1854）の火災後に再建された内裏指図（以下「安政指図」とする。）である。

1区井戸47は、井戸7へ造り変えており、井戸7は昭和時代中頃に廃絶する。安政指図に「細工所」と記載の建物があり、その南側に井戸が描かれており、この井戸が井戸47に相当するものと考えられる。

2区井戸52は、『明治13年御所総図』（1880）に記載があり、『大正11年御所総図』（1922）には記載がないので、この間に廃絶したと考えられる。この井戸の上限として、『承応度御造営内裏指図』（承応四年：1655、図35）に「出雲和泉部屋」と記名された東西方向の建物の南側に井戸の記載がある。これ以降の指図には記載があることから、この井戸もほぼ同位置で存続していたと考えられる。

次に、各内裏指図に対応する建物関係の遺構を新しいものから順に比定する。

1区溝21・22は、「鍵形」を呈する溝で、安政指図では「対屋会所」の建物が描かれた付近であ

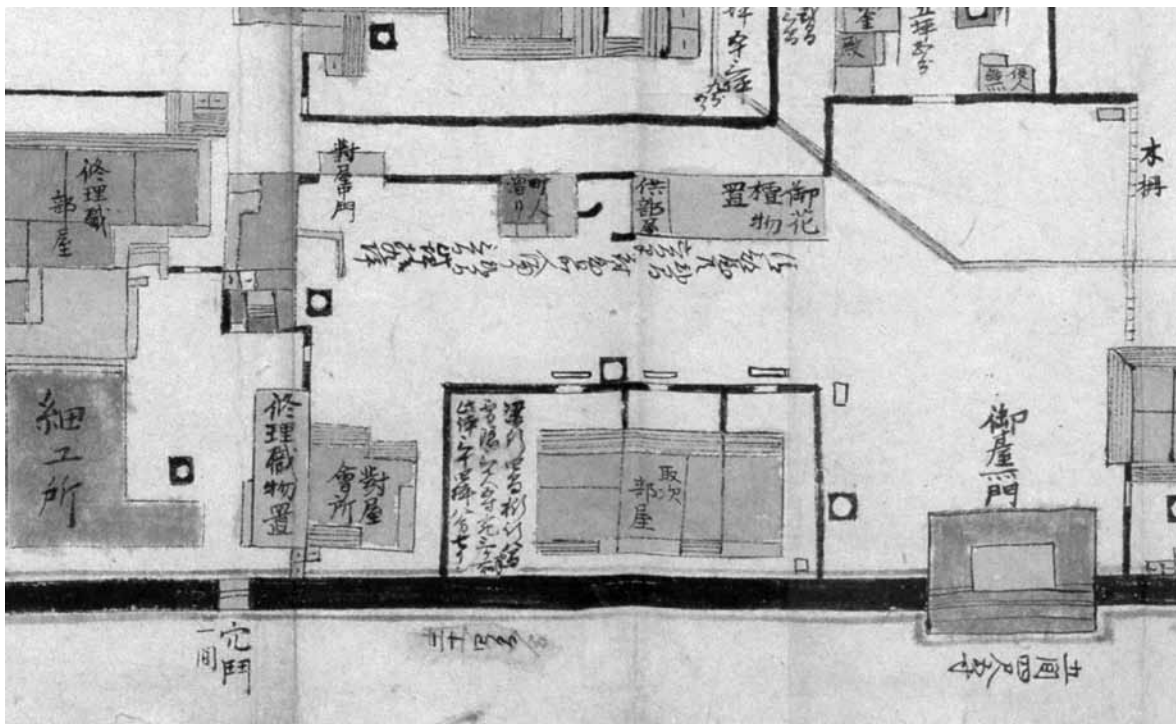


図30 『安政造営内裏指図』部分（京都大学附属図書館所蔵）

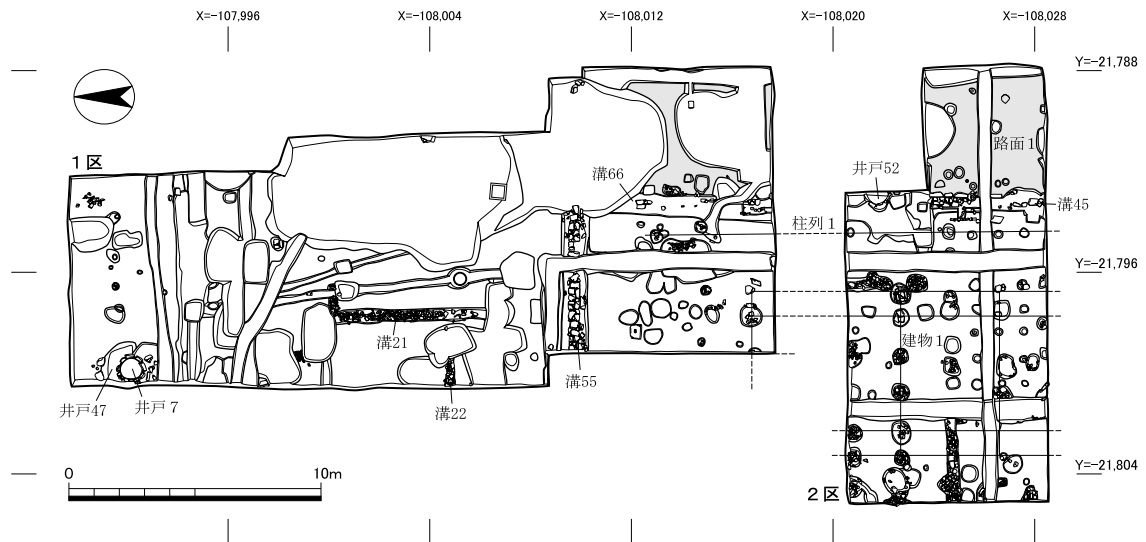


図31 遺構配置図 (1 : 300)

る。位置から建物の東側の雨落ち溝と考えられる。なお、「対屋会所」は『明治13年御所総図』以前に改変される。

1区溝55・66、2区溝45は、「L」字形に繋がる溝で、安政指図には「取次部屋」を囲む塀が描かれている。位置から北東角に相当し、塀の外側の溝と考えられる。この施設も『明治13年御所総図』には「取次部屋」と「対屋会所」の建物が繋がれ改変される。

建物1（新）は、建物1（旧）の上層で検出した遺構で、安政元年（1854）の火災で焼失し、安政2年（1855）に再建された礎石建物である。安政指図の「取次部屋」建物にあたる。建物1（旧）と同じ位置に同じ規模の建物が建てられたと考えられる。

柱列1は、建物1（新）の東側に造られた塀で、1区溝66・2区溝45は、塀に伴う溝である。両遺構とも建物1（新）と同時期のものであるが、『慶応元年内裏図』（1865）には記載がなく、取り壊されていたと思われる。建物1（新）は、『慶応元年内裏図』から『明治13年御所総図』の間に改変される。

建物1（旧）は、建物1（新）の礎石の据付け石を除去した下で検出した建物で、位置・規模とも建物1（新）と同じである。このことから、建物1（新）の前身の『寛政度御造営内裏指図』（寛政元年：1789）に記された「取次部屋」建物と想定できる。建物1（旧）は、1区溝96の掘形の上で検出されていることなどから、天明八年（1788）の火災後に造営された建物と考えて矛盾はない。

『宝永度御造営内裏指図』（宝永六年：1709、図32）は、宝永五年（1708）の火災後に再建された内裏指図で、天明の火災後に埋められた1区溝69と溝96が相当する。この指図には台所門（現清所門）の北側の築地に沿って、細長い南北の建物が描かれており、検出位置から溝96はこの建物の東側に平行して造られた雨落ち溝とも考えられる。1区溝46も天明の火災後に廃棄された遺構である。『宝永度御造営内裏指図』には同位置に「細工所」の建物があり、位置関係から建物の南側に造られた石組溝と考えられる。

さらに、1区溝46の下層で検出した東西溝73は、宝永度造営以前に想定でき、『延宝度御造営内裏指図』（延宝三年：1675、図33）に描かれた東西建物である「台所物置」に付属する溝の可能性
がある。また、2区建物2は、遺構の形態から建物の布掘基礎で北東隅にあたり、検出位置から『延宝度御造営内裏指図』あるいは『宝永度御造営内裏指図』に描かれた建物に関連する遺構と考
えられる。

以上が検出した遺構と内裏指図との検証である。指図でしかわからなかった御所（内裏）北西部
の建物について、一部ではあるが変遷を明らかにすることができたことは今回の成果である。

註

- 1) 図32～36は、藤岡通夫『京都御所〔新訂〕』中央公論美術出版 1987年、を参考に作図した。

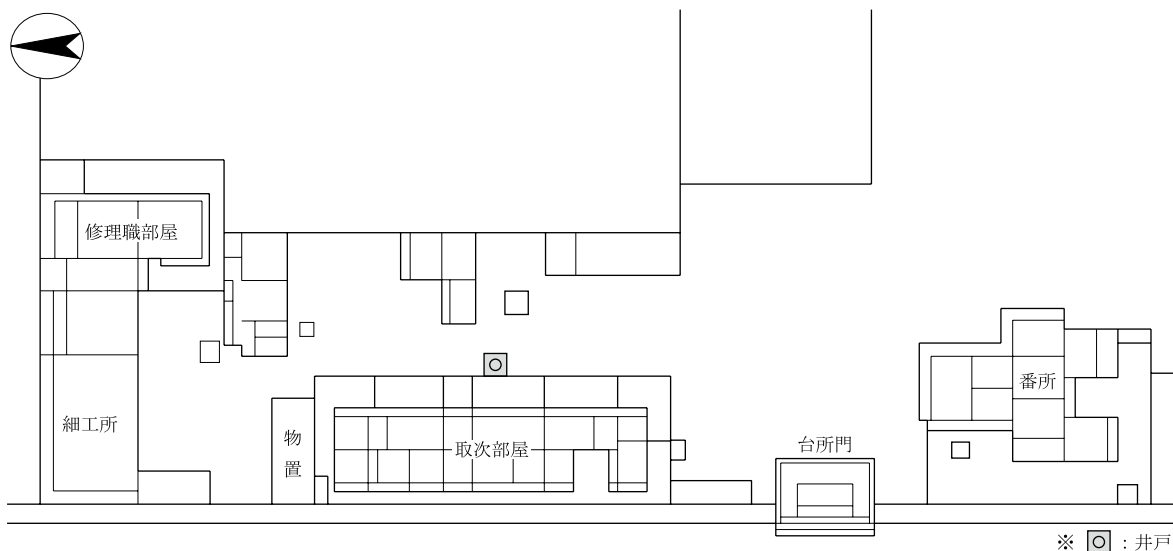


図32 宝永度御造営内裏平面図（宝永六年：1709）

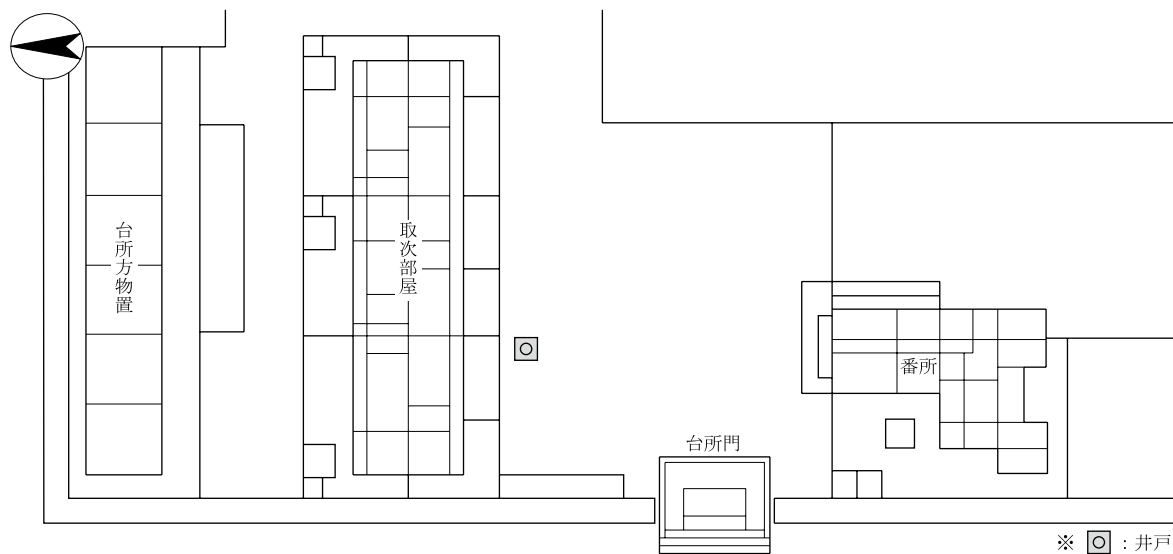


図33 延宝度御造営内裏平面図（延宝三年：1675）

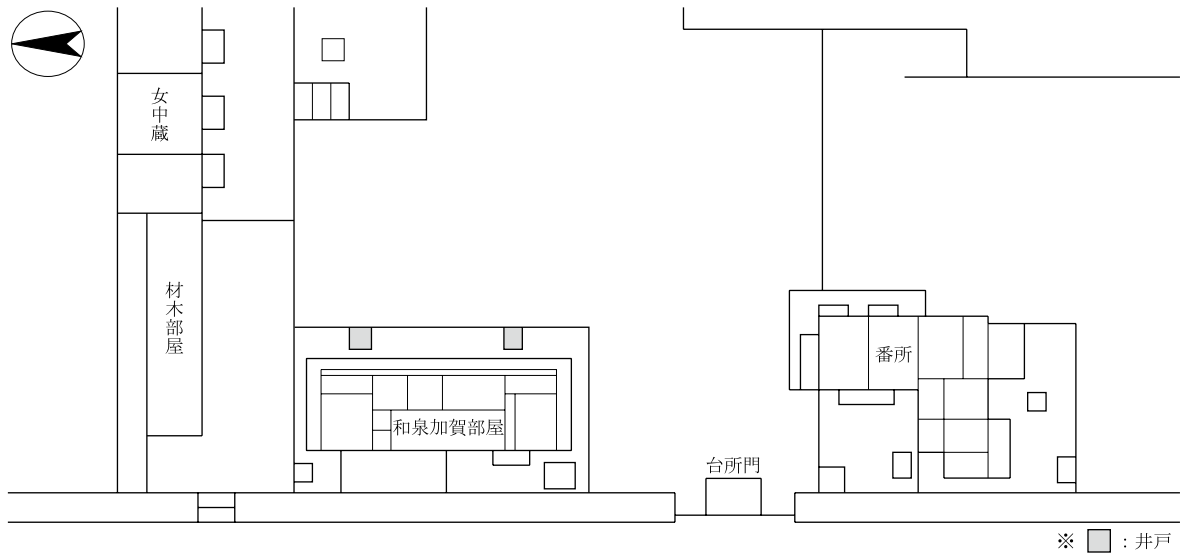


图34 寛文度御造営内裏平面図（寛文二年：1662）

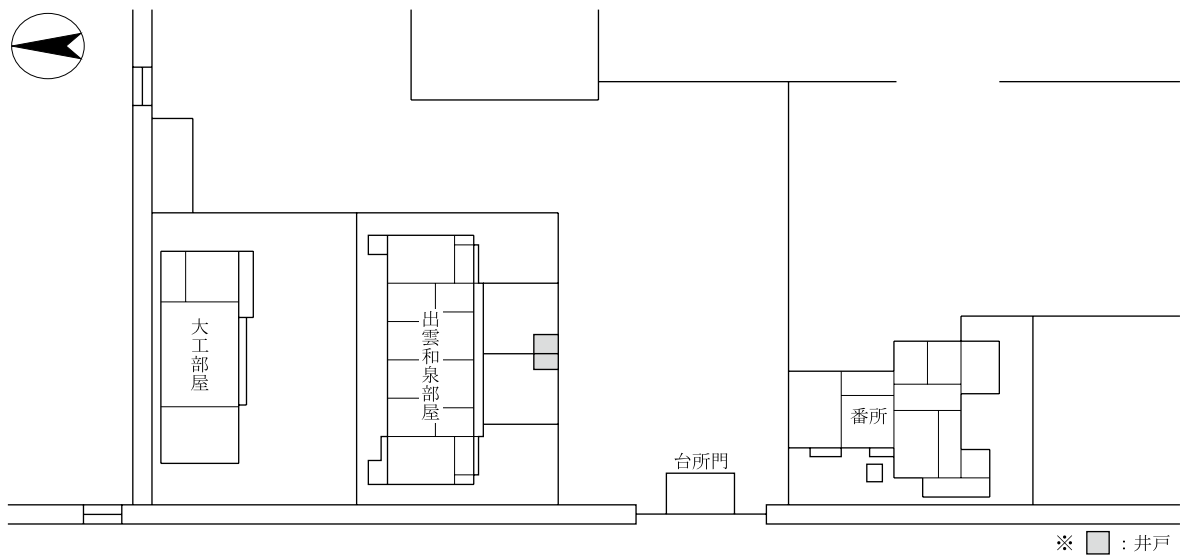


图35 承応度御造営内裏平面図（承応四年：1655）

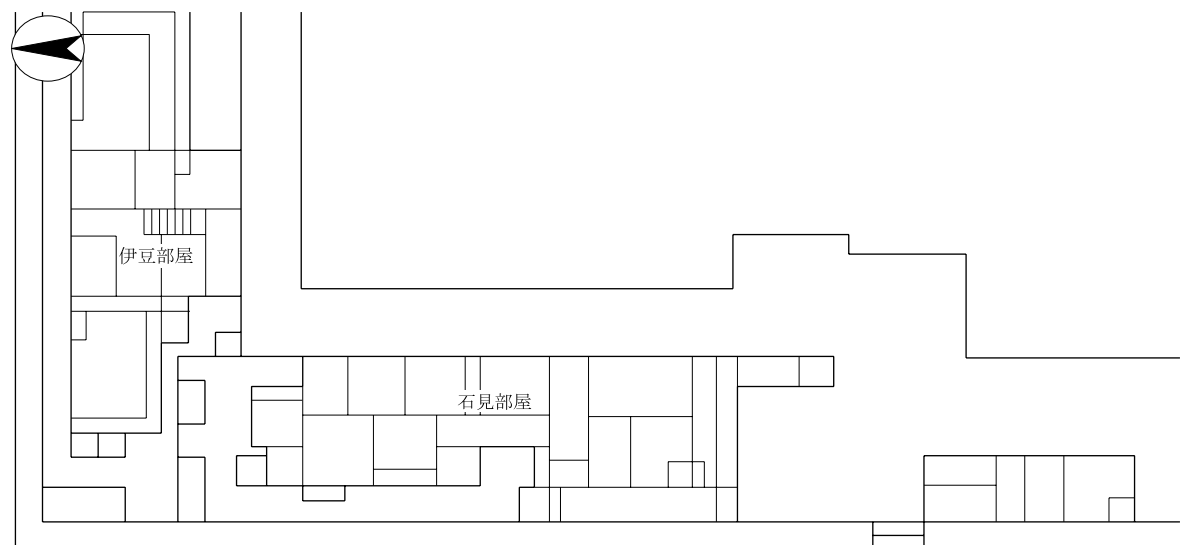


图36 寛永度御造営内裏平面図（寛永十九年：1642）

図 版



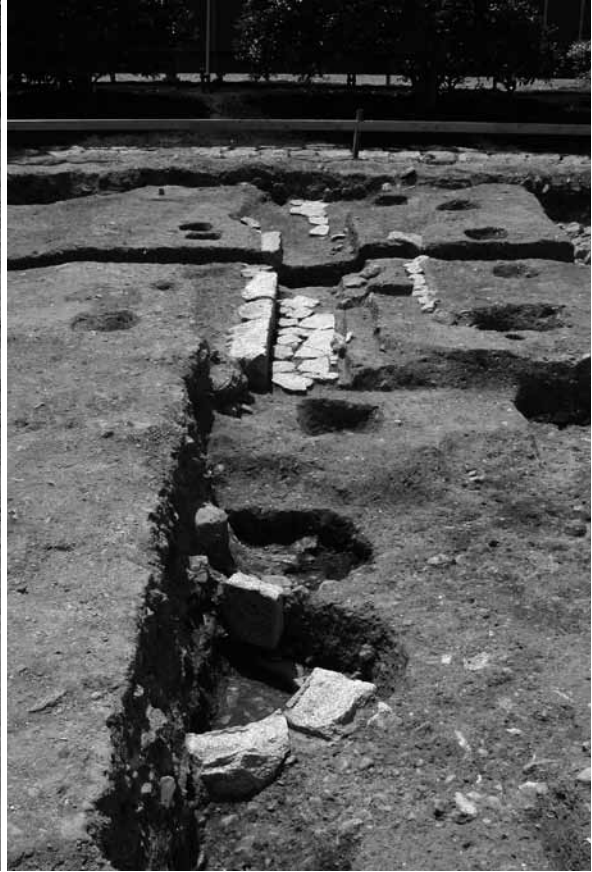
1 1区第1面全景（北から）



2 2区第1面全景（北東から）



1 1区溝55 (東から)



2 2区溝45 (北から)



3 2区井戸52 (東から)



4 1区土坑18 (北から)



5 2区建物1 (新) 礎石67 (北から)



6 2区建物1 (新) 礎石70 (北から)



1 1区第2面全景（北から）



2 2区第2面全景（北東から）



1 1区溝13 (南東から)



2 2区溝96 (北から)



3 1区溝98 (北東から)



1 1区溝46 (西から)



2 2区土坑111 (北から)



3 1区溝73 (西から)



4 1区建物1 (新) 礎石41・(旧) 礎石113 (東から)



5 2区建物1 (旧) 礎石99 (北から)



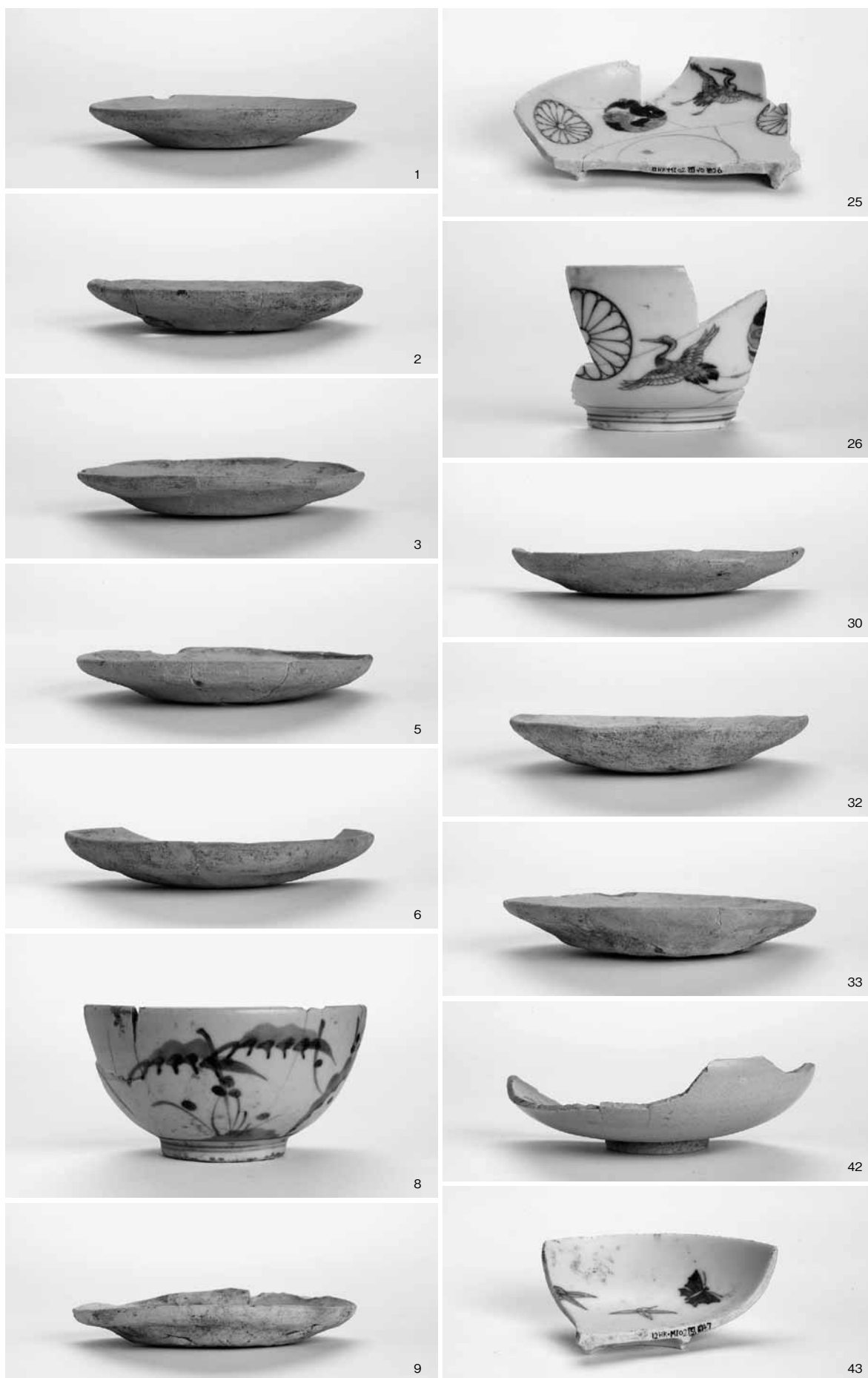
6 立会調査溝112 (南西から)



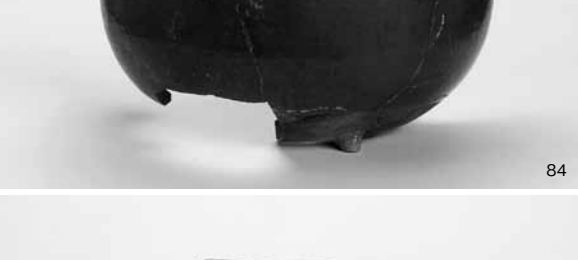
1 1区第3面全景（北から）



2 2区第3面全景（北東から）



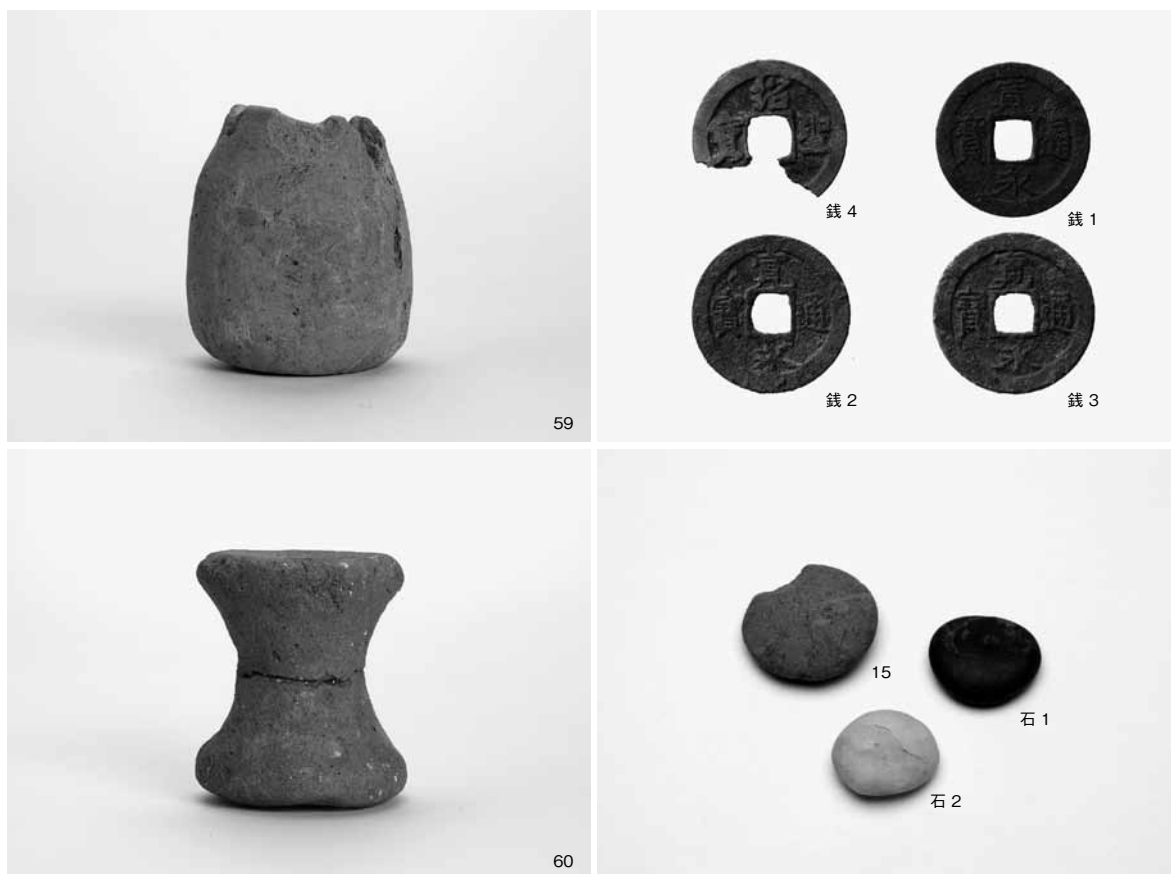
1区土坑18·19·35、柱列1柱穴37出土土器



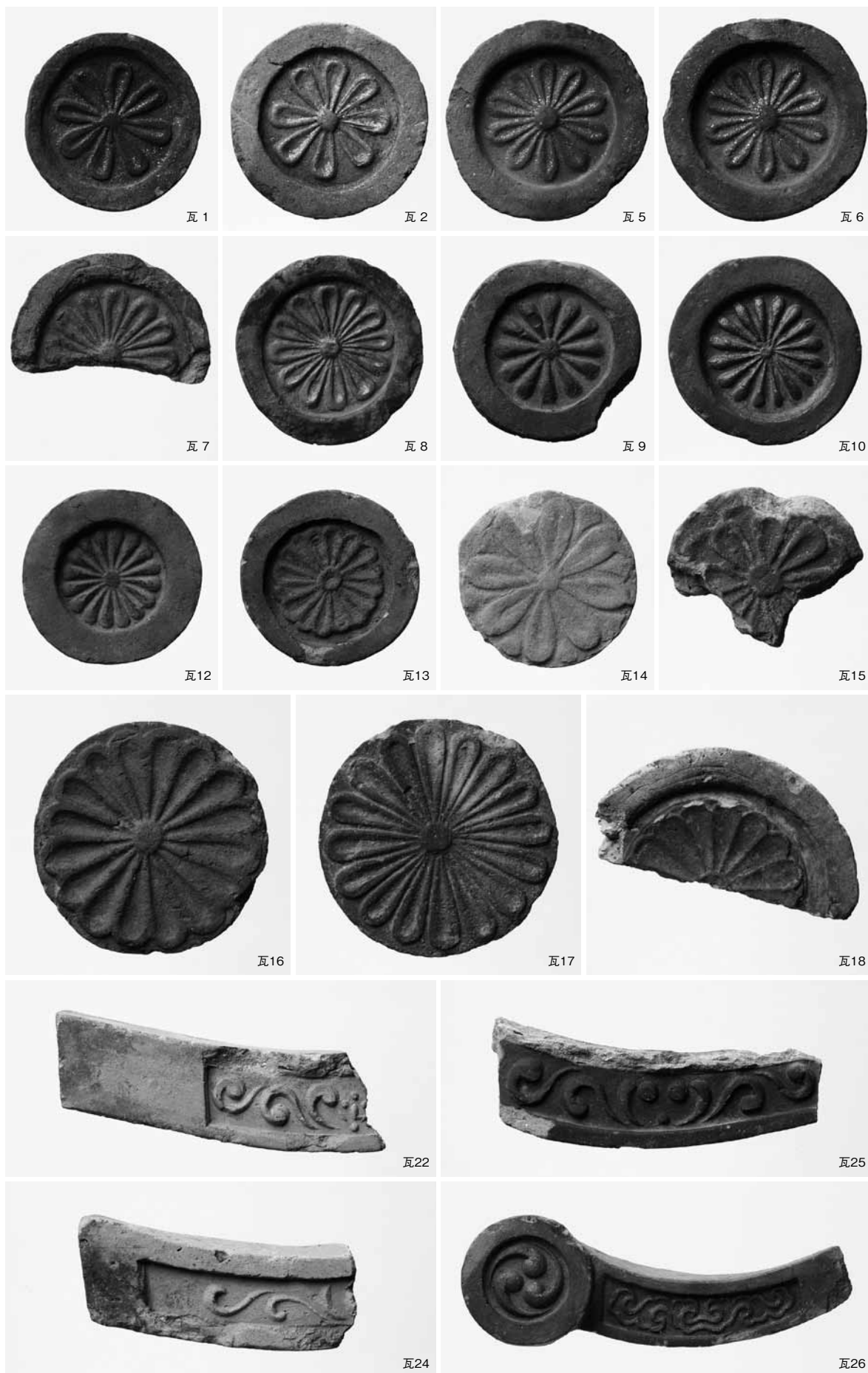
1区沟46、2区土坑111出土土器



1 1区土坑35出土墨書土器



2 塩壺・土製品・錢貨・石製品



棟丸瓦・軒瓦・軒棧瓦

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうほくへんしぼういっちょうあと・くげまちいせき							
書名	平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-9							
編著者名	小松武彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2012年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 くげまちいせき 公家町遺跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 きょうとぎょえん 京都御苑3	26100	1 241	35度 01分 34秒	135度 45分 40秒	2012年7月 9日～2012 年9月4日	408㎡	建物新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡 公家町遺跡	都城跡 邸宅跡	江戸時代前期 ～中期 江戸時代後期 江戸時代末期 ～昭和時代	建物、溝、集石、 整地層 路面、建物、溝、 土坑 路面、建物、柱列、 井戸、溝、土坑、 集石、石列、礎石	土師器、陶磁器、土製 品、瓦、軒瓦、棟瓦 土師器、陶磁器、土製 品、瓦、軒瓦、棟瓦、 銭貨 土師器、陶磁器、土製 品、瓦、軒瓦、棟瓦、 銭貨、石製品		安政度内裏・寛政 度内裏前後の御所 東方の建物群を確 認した。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-9

平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡

発行日 2012年12月28日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961